
魔王な彼女、××の僕

無名 新人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王な彼女、××の僕

【Nコード】

N5256I

【作者名】

無名 新人

【あらすじ】

話したこともないはずなのに、なぜか懐かしい感じがする。そして、ちよつと変わった不思議な女の子。そんなこと、僕はデートすることになった。

——文章のあちこちに細工があります——

【勇児】——告白——

「ああああの……ゆ、ゆうしゃさまに、なつてくれませんか！」

突然投げかけられた言葉に、僕はただ耳を疑うばかりだった。

部室に鍵を掛けて竹刀を背負い、校舎脇の砂利道を歩く。

遠くに見える星空。木の葉がざわめく音が耳をかすめ、ひんやりとした秋の夜風が滑らかに頬を伝っていく。

思わず目を少し細める。疲れて火照った体に、感じるもの全てが心地良い。

僕は部活の帰り道が好きだった。

「あ、あの……」

空耳かと思うような小さい声だった。

振り向くと、両手を後ろにした女の子がうつむいて立っていた。

栗色のショートカットで背の小さい、くりくりした目が印象的なかわいらしい女の子だった。全く知らないコじゃないけど、校内で何度かすれ違ったことがあるだけだ。

その女の子が、いきなりワケのわからないことを言った。

——壮絶にどもりながら。

木の葉の擦れる音だけが響く。

「ごめん」

「そ、そうですよね……突然、すいません」

そのコは僕に背を向け、逃げるように走り出

「あう」

そうとして、つまづいて転んだ。何もない砂利道で。

「大丈夫？」

そつと手を差し伸ばす。

ためらいがちに手をとって、立ち上がる女の子。ケガはしてないみたいだ。

そのコは転んだのが恥ずかしいのか、真っ赤な顔をしてぺこりとおじぎをした。

振り返って、また走り出す。

「ちょっと待って」

女の子を呼び止めた。

ビクッという音が聞こえそうなくらいの反応をする女の子。足を止めて、顔だけ僕の方を振り返る。

「ごめん。さっきの、なに言ってるかよくわかんなくて」

王子様でも変だけど、ゆうしやさま、だ。僕はゲームだのファンタジーだのといったことはさっぱりわからない。勇者は魔王と呼ばれる悪者を退治する人——その程度の知識しかない。それも合ってるかどうか。だから、このコが僕に何を言っているのか、さっぱりわからなかった。

「あの、わたしは……その……」

女の子は僕の方に向き直っていた。目を伏せたまま、口籠る。後

の言葉が続かないようだ。

やがて意を決したように僕を見据え、ぎこちなく口を動かし始めた。震える口元がそのコの緊張を伝えている。

「あ、あの、えと……え、映画！ 映画、好きですか？」

「たまに見るけど」

端的に答えてしまう。さすがに僕でも、このコがデートに誘っているのがわかる。

「よかった……明日、わ、わたしと……」

映画館は行った事がない。どうす

「ゆ、遊園地！ 行きませんか？」

「え？ は、はあ………はい」

僕はやっぱり耳がおかしいのか？ 混乱したまま、思わず『はい』と言ってしまった。

女の子は、じつと僕の目を見つめ続けていた。懸命に。目を逸らすと死ぬかのように。

僕は、その気迫に圧倒されていたのかもしれない。

「そうですよね、ダメですよ……」

女の子はうつむいてため息を吐き、え？ とすぐ顔を上げた。目を丸くしている。よほど僕の返事が意外だったようだ。

「いい、いいんですか！」

女の子は、受験で合格したように取り乱し、両手でバンザイでもしそうなほど喜色満面といった様子だった。さっきからおもしろいように表情が変わるコだ。

「そ、それじゃ、明日の午後一時！ 遊園地の前で待ってますから！」

女の子は僕の返事も待たずにきびすを返し、ひったくりのように走り出した。

「はわっ」

と思つたら、またこけた。

女の子はぶるぶる震えながら立ち上がると、またぺこりとおじぎをして、今度こそ去っていった。

女の子の後ろ姿を、僕は呆然と見つめていた。元気というかドジというか……見てて楽しくなる女の子だった。

僕は今まで浮いた話はひとつもなかった。それはもう鈍感だの武士だの化石だのと言われ続けるくらいに。だから、デートなんてしたこともない。

落ち着いて考えると、急に恥ずかしくなってきた。

この僕が、あんなかわいらしいコと……。

でも、勇者だとかよくわからないことを言うコだった。それに、映画は結局なんだったのか。何もないところで二度もこけるし。

「ちっちゃくてかわいらしい、ちょっと変わったコ……か」

僕はそうつぶやいて、誰もいない砂利道を歩く。

遠くの夜空に、瞬く光がさわがしい。

舞い上がる落ち葉は桜吹雪のようだった。

【ミスト】―宣告―

「私の奴隷になりなさい！」

突然投げかけられた言葉に、僕はただ耳を疑うばかりだった。

香草の入った竹籠を背負い、なだらかな山道を歩く。

木々の隙間から覗く星空。木の葉がざわめく音が耳をかすめ、ひんやりとした秋の夜風が滑らかに頬を伝っていく。

思わず目を少し細める。疲れて火照った体に、感じるもの全てが心地良い。

僕はこの山道が好きだった。

「ちょっとアンタ！」

ふいに、背後から怒鳴りつけるような声がした。

振り向くと、腕を胸の前に組んでいる少女が、僕を睨みつけるように立っていた。

赤毛のショートカットで背の小さい、きりつとした瞳が印象的な凛々しい少女だった。どこの貴族なのか、真つ白い絹のような短いドレスを着ていた。こんな山道に、いったいなぜ？ しかもこんな時刻に。お供の人も見当たらないし……。

その少女が、いきなりワケのわからないことを言った。

――僕を指差しながら。

木の葉の擦れる音だけが響く。

「お断りします」

「……なんですって？」

貴族らしき少女は、大股でずんずん僕に歩み寄

「あつ」

ろうとして、つまづいて転んだ。木の枝に引っかかったらしい。

「大丈夫？」

そつと手を差し伸ばす。

ためらいがちに手をとって、立ち上がる少女。ケガはしてないみたいだ。

少女は転んだのが恥ずかしいのか、真っ赤な顔をしていた。

「いつまで触ってんのよ！」

そう言って、僕の手を払いのけた。

「ご、ごめん。じゃあ僕はこれで」

少女の横を通り抜ける。

「ちよつと待ちなさい」

後ろから肩を掴まれた。ビクッという音が聞こえそうなくらい反

応する。足をすくませて、顔だけ少女を振り返る。

「だーかーらー、私の奴隷になりなさいって」

「ごめんなさい。なに言ってるかよくわからないんですけど」

いきなり奴隷になれ、だ。僕は貴族なんて子供の頃にしか見たことがない。奴隷はただ貴族の言いつけを守る——その程度の知識しかない。それも合ってるかどうか。とは言え、なんで僕なのかさっぱりわからなかった。奴隷はさらってくるものなんだろうか？

「つべこべ言わずに、首を縦に振ればいいのよ！」

「いや、そう言われても……」

僕は少女の方に向き直っていた。

思わず目を伏せて口籠る。後の言葉が続かない。

「ああもう！　じれったいわね！」

少女は地団駄を踏み出した。僕よりずっと小さいのに、なんだかおっかない。

それに確か、貴族に逆らえば——命はない。よくて牢獄での生活が待っている。

僕は意を決したように少女を見据え、ぎこちなく口を動かし始めた。震える口元が僕の緊張を伝えている。

「わ、わかりました……」

「ふん、最初からそう言いなさい」

冷然と答えられる。これから少女に何をさせられるかと考えたただけで、背筋に悪寒が走った。

「アンタ、サーカス行った事ある？」

唐突に聞かれる。子供の頃に遠目でしか見たことがない。どうす

「あ、やっぱいい」

「え？　は、はあ………はい」

どんな無茶を言われるのかと気が気でない。僕はじつと少女の目を見続けていた。懸命に。目を逸らすと死ぬかのように。実際下手なことをすれば、死ぬかもしれない。

僕は完全に恐怖で狼狽していた。

「そうね……」

少女は腕を組んだまま目をつむり、何事か思案し出したようだった。

「とりあえずアンタ、町まで来なさい」

目を開けた少女は、邪悪としか思えない笑みを浮かべてそう言った。よほど楽しいことを考えついたらしい。

「それじゃ、明日の午後一時ね。門の前にいるから」

少女は僕の返事なんて不要とばかりに、きびすを返して歩き出した。

「ぐっ」

と思つたら、またさっきの木に引つかかってこけた。

少女はぶるぶる震えながら立ち上がると、僕を一度鋭く睨みつけ、今度こそ去っていった。

少女の後ろ姿を、僕は呆然と見つめていた。自分勝手というか傲慢というか……貴族ってこういうものなのか。

僕は今まで静かにひっそりと自然に囲まれた小さな村の離れで暮らしてきた。それはもう町の人達にすれば、世捨て人とか森の主とか山の精霊とか言われるくらいに。だから、奴隷なんて見たことがない。いったい何をさせられるのか……。

落ち着いて考えると、さらに恐ろしくなってきた。

この僕が、町に移り住んで奴隷として生きていく……。

「僕は何か悪いことでもしたのかな……？」

そうつぶやいても返事はない。誰もいない山道を歩く。足取りが重い。

遠く、町の灯りがくすんで見える。

北風で舞い上がる落ち葉が、冬の始まりを告げるようだった。

【勇児】―衆人環視―

僕は急いでいた。それはもう、今までないぐらい。

脇目も振らず、ただひたすら走る、走る走るはしるはしる肩がぶつかりそうになる、走る走るはしるはしるハシルハシル――

喉を鳴らし、胸で荒い呼吸をする。額に滲む汗が顎からしたたり落ち、じつとりと重くなった服は肌に張り付いていた。

手を膝についてうつむき、早鐘を打つ鼓動を落ち着かせる。

遊園地に着いたのは、午後三時。二時間の遅刻だ。ここまで何かに遅れたことは一度もない。

顔だけ上げて、あたりを見回す。

さすがに二時間も待つてとは思えないけど、それらしい人をひとりひとり……ん？

明らかに目立っているコがいた。マスコットの着ぐるみがいるように、通りすぎる人が顔を向けている。家族連れの小さい子供が指を差す。

その目立ちに目立っているコは、僕の方を向いてぺこりとおじぎをした。僕を待っていたみたいだ。

まぎれもなく、昨日の彼女だった。まだいてくれてよかったと、僕は胸に手を当て、安堵のため息を吐いた。

彼女がこちらに駆け寄ってくる。

「ふぎゅ」

――こけた。

ふぐぐ、なんてうめき声を上げながら立ち上がる彼女。

裾を払っている彼女に歩み寄る。

「大丈夫？」

「は、はい！ 顔はぶつけてません、お嫁にはいけます！」

転び慣れているのか、ケガはないようだ。それにしてもよくこける。

「足、悪いの？」

「ち、違います。ちょっと転びやすいだけです」

「そっか。良かった」

「え？ そんな、全然良くないですよ」

「ああ、それもそっか」

足じゃなくて、頭の方に何かあるかもしれないし。

「ところで、来てくれたんですね……もうダメかと思ってました」

女の子は目を細める。二時間も遅刻した僕を責める様子は微塵も感じられない。

「ごめん。かなり待たせたよね」

素直に謝る。遅刻は遅刻だ。

「いえ、わたしもさつき来たところですから」

あからさまなウソを言う。

「それに、相談もしないで予定決めちゃったの、わたしですし」

「ああ、そうじゃなくて」

「んう？」

「アテが外れたというか」

「うー……んと??」

「どっちの遊園地かわからなくて」

僕は二時間前まで、近郊にある別の遊園地に行っていた。大遅刻の理由だ。女の子のことはケータイどころか名前すら知らない。

「あ、あ、あ……あああああ！」

耳が痛い。女の子が青い顔をして両手で頭を抱えている。

どうやら僕に“遊園地”としか言っていなかったことを思い出してみたいだ。

「すいません！ ごめんなさい！ いつか死にそうになったら切腹してお詫びします！」

「気にしてないからいいよ。僕も遅刻したし、ずっと待っていてくれたみたいだし」

「あ、ああありがとうございます！ お客様は神様です！」
よくわからないけど、感謝してくれてるみたいだ。

「それはそうと、いくつか聞いていいかな？」

とりあえず名前ぐらいは聞いておかないとまずい気がする。

「はい、なんなりとお聞きくださいませ、ご主人様」

「うん、ご主人様じゃないんだけど。名前はなんていうのかな？」

「わたしはカイリョーシア・パンナコッタと言います」

「珍しい名前だね。日本人にしか見えないけど、どこの生まれかな？」

「えとー、東ヨーロッパあたりだと思います」

「そつか。長い名前だから短くして……そうだな、かいぱ

「ごめんなさい、今野麻緒といいます」

「僕は今野勇児。名字一緒だね、麻緒ちゃん」

「ま、ま、まおちゃん、ですか……あの、わたし、チケット買ってきます！」

女の子は耳を真っ赤にして、湯気が出そうになっていた。まおちゃんと呼ばれて恥ずかしいらしい。慌てて窓口まで走っていった――こけた。

戻ってきた麻緒ちゃんにチケット代を渡す。おごりでいいと手を振る彼女に、無理やり握らせた。

「さて、じゃあ本題に入ろうか」

遊園地へ入る前に、僕はずっと気になっていることを聞くことにした。

「え？ ホンダイに入るんですか？ 遊園地に入るんじゃないですか？」

「できれば先に本題に入らせて」

「はい、じゃあホンダイに入ります！」

「麻緒ちゃん、なんで羽生えてんのかな？」

そう、彼女はコウモリのような黒い翼が背中からによつきり出ている。

さつきから彼女と一緒にいる僕も、注目的になつていた。まさに衆人環視だ。なにかパフォーマンスでもしなきゃいけないような気さえする。

「えとー、かわいくないですか？」

羽をばたばたさせる彼女。良く出来たアクセサリーだ。

「うーん。わかんないな」

「そうですかあ……残念です」

「それにその、頭に乗ってるの」

「あ、これはネコミミです……これも、ダメですか？」

ネコミミとやらは髪飾りにくつついてるだけのようだ。動いたりしなかった。

「ダメじゃないけど、僕はそういうのわからないから」

それに、女の子に服装のこととやかかく言いたくないけど——真つ黒いガウンというのかローブというのかを羽織っているし、その上から、これまた真つ黒なマントを着ている。コスプレってやつなのか、それともこれが普段着なんだろうか。

「わ、わかりました！ ご迷惑なら、羽をもぎます！」

「いや、うん、よく見ればかわいいよ、羽は」

もがれても困る。

「そうですか。じゃあ羽だけつけておきます」

と言つて、いそいそとネコミミをしまふ彼女。

焼け石に水——なんとなくそんなことわさが脳裏に浮かんた。

「それじゃホンダイも済んだし、そろそろ行こつか」

僕はあきらめてため息を吐いた。ド派手な彼女と遊園地に入る覚

悟を決め、歩き出す。

「あ、あ、あの！」

振り返ると、彼女は立ち止まったままだった。どもりながら何か言おうとしているようだ。

「て、ててて、て、て……」

「て？」

「て、て……てんぷらうどん！」

「たぶん、園内で食べられるんじゃないかな」

「じゃなくて！ ててて、てお、てお……おおお、お……オットセイ！」

「遊園地に？ さすがにオットセイは干からびそうだよ」

「ち、違います！ て、手を、つ、つないでも、いいいですかっ！」

「は、はあ……はい」

まるでこれから果たし合いでもするかのような気迫に圧倒され、手を差し出す。

彼女が腫れ物にさわるかのように、軽く触れてくる。

そのまま、彼女は手を震わせるばかりだった。

じれったくなつて握り返すと、彼女はびくつと肩をすくませる。

彼女の手は柔らかい感触がした。

ふと見上げれば、彼女は握られた手をじっと見つめたままだった。完全に固まっている。

いつの間にか、つられて僕も手を見つめていた。

つないだ手から彼女の体温が伝わる。

僕の手が冷たいのか、握っている彼女の手があたたかい。

どこか懐かしいぬくもり――

なんだか僕まで気恥ずかしくなってきた。

ただでさえ注目を集める翼の生えた彼女と、これからずっと手をつないで行動しなければならぬ。

毒を食らわば皿まで——なんとなくそんなことわざが脳裏に浮かんだ。

僕はきつと、遊園地へ精神鍛錬か何かの修行に来たんじゃないかと思う。

そう考えるのは、僕の照れ隠しなんだろうか。

【ミスト】―暴君―

僕は急いでいた。それはもう、今までないぐらい。

脇目も振らず、ただひたすら走る、走る走るはしるはしる足がもつれそうになる、走る走るはしるはしるハシルハシル――

喉を鳴らし、胸で荒い呼吸をする。額に滲む汗が顎からしたたり落ち、じつとりと重くなった服は肌に張り付いていた。

手を膝についてうつむき、早鐘を打つ鼓動を落ち着かせる。

城下街の門前に着いたのは、午後三時。二時間の遅刻だ。ここまですぐに遅れたことは一度もない。

顔だけ上げて、あたりを見回す。

さすがに二時間も待つてとは思えないけど、それらしい人をひとりひとり……ん？

明らかに目立っている少女がいた。魔物でもいるかのように、通りすぎる人が顔を向けて遠ざかる。家族連れの小さい子供が少女を見て泣き出す。

その目立ちに目立っている少女は、腕を組んで城壁に寄りかかり、僕の方を吊り上った目で睨んでいた。僕を待っていたみたいだ。

まぎれもなく、昨日の彼女だった。何を言われるだろうかと、僕は胸に手を当て動悸を抑える。

怒り心頭の彼女が、大股でずんずん歩み寄ってきた。

「うっ」

――こけた。

ふぐぐ、なんてうめき声を上げながら立ち上がる彼女。裾を払っている彼女に歩み寄る。

「大丈夫です？」

「こ、この！ アンタのせいよ！」

「そんな無茶苦茶な……」

しかし、転び慣れているのか、ケガはないようだ。それにしてもよくこける。

「足、悪いんです？」

「そんなワケないでしょ。たまたまよ、たまたま」

「そうですか。そういうことにしておきましょう」

「ちよつとアンタ！ 私がころころころころ転がってるとでも思ってたんじゃないでしょうね？」

声に怒気が孕まれていた。

少女の目の奥が光る。黒い瘴気のようなものまで立ち昇っている気が……。

「め、滅相ありません」

彼女の形相に押し黙り、慌てて目を逸らす。

しかし、ころころころころじゃなくても、ころころぐらいは転がってる気がする。

それが彼女の印象と違って少しかわいいなどと言おうものなら、今すぐ殺されそうだ。

「それにしても…… やつつつと来たわね！」

少女は目を細め、不気味な笑みを浮かべている。

「す、すいません。かなり待たせましたよね……」

素直に謝るしかない。遅刻は遅刻だ。

「私を待たせるなんて、覚悟はできてるんでしょうね？」

二時間も待たされたイライラが、彼女の吊り上った口の端から零れ落ちそうだ。あからさまに許してくれそうもない。

それでも、言い訳せずにはいらなかった。

「そう言われてもですね、いきなり予定を決められたワケで……」

「ふーん。で？」

こ、これは意にも介してくれない気配が。

「え、ええと、あとはアテが外れたと言いますか……」

「何言つてんの？」

「どの門なのかわからなくて」

この広大な城下町には、東西南北にそれぞれ四つある。一つずつあたつていき、三つ目にして、ようやく彼女のいる門を見つけられた。これが僕の大遅刻の理由だ。

「あ、そう言えばそうだったわね」

彼女は、けろつとして言い放った。僕に“門の前”としか言っていなかったことを思い出したようだが、悪気を感じている様子は微塵も感じられない。

汗だくになつて辿り着き、その結果が——これ。何ともやるせない。

「そうねえ……じゃあ目、閉じて」

恐る恐る、言われた通り目を閉じた。

ひたひたと彼女が近づく。

こ、これは——

「く、くすぐりたい！ ふ、くくくくく……」

脇腹をくすぐるという予想外の攻撃だった。

「すいません！ 僕が悪かった、です……っから……くう」

こうなると、もう謝ることしかできない。

彼女は僕の様子に満足したのか、手を離す。

「言い訳なんてするからよ、まったく」

声では怒っているようだが、いたずらっ子のような表情を浮かべていた。

「ほら、許してあげたんだから、お礼は？」

「あ、ありがとうございます」

彼女の顔をうかがつて胸を撫で下ろす。なんだかよくわからないけど、許してくれたみたいだ。

よかった……。

いや、ちょっとまで、全然よくない。そもそもなんで僕はお礼な

んて言ってるんだ。

「で？ アンタ、聞きたいことはないの？」

彼女の唐突な言葉が、僕の思考を遮った。

そう言われれば、聞きたいことは山ほどある。

「え、えーと。僕はどうなるんです？」

「残念、はずれ」

はずれらしい。いや、質問にはずれなんて言われても。

「そ、それじゃ……僕はいつ解放されますか？」

「つまんない」

気だるそうに言われる。笑わせれば良いわけですか……。

「そうそう。私のことは“ご主人様”って呼ぶことね」

「で、ではご主人様。お名前はなんとおっしゃるのでしょうか？」

「私は……そうね、うーん」

彼女は顎に手を置いて、なにやら思案している。

「私の名前はカイリョーシア」

なぜ名前を考える必要があったのか。それに、貴族であるなら家名があるはずだ。

やはり、この少女は怪しい。

「珍しい名前ですね。どこの生まれです？」

「んー。考えるの、めんどくさい」

頭をぽりぽり掻きながら言う彼女。

か、考えるのめんどくさいって、ウソついてますって言ってるのと同じじゃ……。

「で、アンタはどうなのよ？」

自分のことは棚に上げ、僕に振る彼女。しかも、義理で聞いてやっつてんのよ、と言わんばかりの口調だ。

「僕は、ミストです」

「そう。じゃあアンタの名前は、どてかぼちゃね」

「ど、どてかぼちゃですか……」

僕の名前は気に食わなかったのか。それにしても、どてかぼちゃはひどい……。

ともかく僕は、ずっと気になっていることを聞くことにした。

「じゃあ本題に入りましょう」

「却下！」

ぴしゃりと言い放たれる僕。あっけなく本題は幕を閉じた。

しかし、そう簡単に引き下がるわけにはいかない。

「で、できれば本題に入らせてください！」

「いいわよ、どてかぼちゃ。二十字以内ね」

「あ、ありがとうございます」

「あと七字」

そんなバカな……しかも読点まで入ってるなんて……。

「なぜはねはえ？」

「何言ってるかわかんない」

そりゃそうだ。

「な、なぜ翼が生えてるんでしょうか？」

そう、彼女はコウモリのような黒い翼が背中からによつきり出ている。

さつきから彼女と一緒にいる僕も、注目的になっていた。まさに衆人環視だ。なにか口から火でも吹いて芸の一つでもしなきゃいけないような気さえする。

「なんだ、そんなことなの？ お気に入りのよ、これ」

羽をばたばたさせる彼女。良く出来たアクセサリー、なのか？

「うーん。そうですか」

「なに？ 文句でもあんの？」

「い、いえ。あとはその、頭に乗ってるのは？」

「これ？ これは耳だけど？」

まるでネコの耳のようだ。本物のように、時折音のする方へ向かってぴくぴく動いている。

髪止めか何かなのか？ 羽といい耳といい、なんて精巧な作りなんだろう。

「そうですか。なんだかすごいですね……」

彼女の全身を改めて見回す。

服装にしたって奇抜だ。彼女は白と黒を基調にしたドレスの上から真っ黒いローブを羽織っている。そしてさらに、これまた真っ黒なマントを着ている。貴族と思しき金や銀をあしらった派手な格好をしている人からも、興味深々といった目で見られていた。

「なに？ どてかばちゃは私の格好がそんんなに気に食わない？」

そう言つて、僕の肩をがっしり掴む彼女。どこにそんな力があるのか、肩からぎしぎしと音が聞こえてきそうだ。

「いえ、そんなことは……にっちも、さっちも、いきません」
う、腕がもがれそうだ……。

「ふうん。まあいいわ」

僕から手を離し、耳をぴくぴくさせる。

まるで暴君——そんな例えが脳裏に浮かんだ。

「じゃ、ホンダイは済んだわね。とつとと行くわよ」

そう言つて歩き出す彼女に、僕はため息を吐きながらついて行く。なににせよ、この少女が何者なのか、もうしばらく様子を見たほうがいい。

「あ、そうだ」

何か思い出したかのように、彼女は振り返つて僕に歩み寄った。

「ほら、手を出しなさい」

「は、はあ」

彼女の目の前にすつと右手を出す。

「違う、そうじゃない。手から鳩でも出す気？」

「こ、こうです？」

両手を前に出して組み合わせず。

「祈つてどうすんのよ!」

「そう言われてもですね……こうですか？」

両手の指先をあわせて、彼女の前に突き出す。

「なにそれ？ そっから見えない何かでも見えんの？」

「う、ううーん」

手のひらを彼女に向け、両手を前に突き出す。

「はあ……まったくしょうがないわね」

なにがしょうがないのかさっぱりわからない。が、彼女は僕の手を取って握り締めてきた。

予想外の出来事に、僕は肩をびくつとすくませてしまった。手を折られるのかと思ったが、違ったようだ。

なぜこんなことをするのか、まったくもって理解できない。

ふと、そっぽを向く彼女の横顔をのぞき見ると、頬が仄かに赤くなっている気がした。

彼女は僕の手をぐいっと引っ張って歩き出した。

きつく握られた手から、僕の体温が伝わっていく。

彼女の手はやわらかい。

冷たかった彼女の手は、少しあたたかくなっていた。

なんだか気恥ずかしい。

彼女は顔をそむけたまま、ずんずん歩いて行く。

僕は前のめりになりながらついていった。

ただでさえ注目を集める翼の生えた彼女と、これからずっと手をつないで行動しなければならぬのか。

「彼女には逆らえないから仕方なくだ」そう言い聞かせるように、僕はつぶやいていた。

【勇児】——絶叫——

秋の陽気でぽかぽかと暖かい土曜の昼下がり。カップルや家族連れでこった返す遊園地。ゴーカートでハンドルを乱暴に振り切り、あちこちぶつかりながら回り続ける子供。カートが近くに来るたび、手を振ってシャッターを切る大人。派手な外装のレストランにできる長蛇の列。急落下して風を切り裂くようなフリーフォールの轟音が、絶叫と共に運ばれてくる。遠目に見える遊園地のマスコットキヤラクターには、砂糖へ群がる蟻のように人の波が押し寄せていた。肩がぶつかりそうなほどの人、ひと、ヒト。

そんな中、僕は羽の生えた女の子と手をつないで歩いている。

正面から来た子供が立ち止まり、妙なイキモノでも見つけたかのように、彼女をじっと見上げていた。

続いて家族連れの母親にマスコットと間違えて声をかけられる彼女。「違いますよ、たぶん」と苦笑いを浮かべながら、曖昧な説明をする僕。

彼女は何も言わず、ふやけた顔でじっと手を見つめているようだ。そういう僕も彼女の方をあまり見られない。何割かは彼女の格好のせいだけ。

どこに顔を向けても、動物園のパンダを見るような視線とぶつかる。僕はずっと、目のやり場に困っていた。いつそのこと馬のかぶりものでもかぶって彼女と練り歩けば、見せ物として割り切れたかもしれない。

たつぷり二十分ほどぐるぐると歩いただろうか。このままでは本当にただのマスコットになってしまう。

そろそろ周りの視線に慣れてきた僕は、久しぶりに口を開いた。

「とりあえずどうしようか」

彼女を横目に聞いてみる。

「えと、お、お好きなように……」

あわててうつむいて目を逸らす彼女。

「そう言われても、僕は遊園地なんて来たことないから」

困ったな、と辺りを見回す。どれがいいのかなんてさっぱりわからない。

「それじゃ、あ、あれなんてどうですか？」

彼女があさつての方を見ながら指差したのは、絶叫とともにうねりを上げてレールを滑っているジェットコースターだ。

気持ち悪くなりそうで少し不安だけど、彼女が乗りたいのならそれでいいだろう。「そっか。じゃあ行こう」と彼女を引っ張る。

「え？　ほんとに行くんですか？」

顔を上げていた彼女は、引っ張られながらそんなことを言い出した。

「あれ？　乗りたくないの？」

僕は耳を疑った。彼女が指差していたのは、確かにジェットコースターだったはずだ。

「いえ、あの、わたしは……なんでもいいです」

彼女はまたうつむいて、もじもじ出した。

僕は何か恥ずかしいことでも言ったのか？

「そ、そう。じゃあ行こっか」

もしかしたら、『遊園地のデートはメリーゴーランドから』なんていう茶道のお手前のような常識でもあったのかもしれない。うかつだった。

羽をはずした彼女とジェットコースターの最前列。

コースターがカタカタと音を立てて昇り始めた。

隣の彼女を見る。これまたカタカタと音が聞こえそうなくらい震えていた。目には涙が浮かんでいる。

僕は言うまでもなくジェットコースターは初めてだ。安全だと頭ではわかっている。だからなぜ、乗ってる人があんなに絶叫しているかなんてわからなかった。

「きゃああああ！」

「まだ昇りきってないよ」

「ご、ごめんなさい、気を紛らわそうと」

「ジェットコースター、苦手……だよね？」

「はい！ 刑事さん、カツ井なんてなくても全力で白状します！」

「僕は刑事じゃないけど。なんでこれにしたの？」

「ううう……ぼーっとしてたんですう」

そういうことは早めに言って欲しい。

なおも上昇を続けるコースター！

彼女はカタカタどころかガタガタ震え出した。涙を端に浮かべながら固く目を閉ざし、歯を食いしばっている。唇が小刻みに震えていた。

恐怖が最高潮に達しようとしているのか。

「あ、あ、ああ……わたしの骨は、海にまいてください……」

「海が好きなんだね」

「ああ……どこまでも冷静で……す……あああああ！」

急降下！

落下と言ってもいい。腹の奥から何かひやりとしたものが込み上げ、全身の血が一気に昇っていく感覚。

なぜ絶叫するのかわかる気がする。いや、わかる、声でも上げたくなる。

隣はもう、目を見開いてぼろぼろ涙を横に流しながら、きゃあきやあ叫んでいる。

天地が逆転する！

続いて左から右へ急カーブ！

目まぐるしく変わる景色に頭が追いつかない。

また急降下！

たまらず、うぁっと短く声が漏れてしまう。

もうあまり音も聞こえなくなってきた。隣からの悲鳴、轟々とした風の音、レールの摩擦音だけがかすかに聞こえる。

左から右へ急カーブ！

直後、回転しながら落下！

「うぁ、あ、ああ……ああああああ！」

結局、二人して聞くに堪えない、情けない声を上げ続けていた。

コースターが停止しても、二人とも顔面蒼白、両腕をだらりとしたまま呆然としていた。魂が口から出ていたかもしれない。

出口を出たところで、ぼーっと立ち尽くす。

「ナカナカ……タノシカタデス、ネ」

魂を吐き出すかのように、彼女がつぶやいた。

「くせになりそうです」

ふふ、と不気味な笑みを浮かべる彼女。

「次……あれは、どうです、か……」

彼女は虚ろな表情でぐるぐる高速で回っているコーヒークップを指差していた。

「……ぼーっとは、してないよね？」

まだ頭がぐるぐるしている僕は、額を押さえながら聞いた。

「ふふふ……きつと楽しいですよ」

彼女は怪しげな笑みを浮かべたまま、ひたひたとおぼつかない足取りでコーヒークップに向かっていく。

重症だ。ぼーっとしている方がよっぽど良い。

魂よ、戻って来い。

「ほんとに行くの？」

「ええ……きつと、辿り着いてみせます」

これまで以上に何を言ってるかさっぱりわからない。ゆらゆらと揺れながら歩く彼女の後からついていく。

彼女を止めなかったのは、怖いもの見たさからかもしれない。

コーヒークップに乗り込む。

ぐるん——ぐるん——と横にゆっくり回転していくカップ。

いつの間にか、彼女の笑顔が凍りついていた。今さら正気に戻ったのだろうか。

「あ、あ、ああ……わたし、走馬灯が見えます」

「これまでの人生じゃないなら、メリーゴーランドだと思うよ」

ぐるんぐるん、と徐々に速度が上がるカップ。

耳鳴りがする。耳の奥が締め付けられているかのようだ。

彼女は両手でカップにしがみついていた。すでに目の焦点が合っていない。

「こ、このままじゃ……バターになっちゃう」

「加熱処理、しないと、難しそう……だ、ね」

カップはぐるつぐるつと高速で回転し出した。

回転の遠心力で体が一方に引っ張られる。まともに座ってられない。全身の血が片側に寄っていくような感じがする。

僕も気持ち悪くなってきた。喉の奥に込み上げてくるものを感じる。

回る景色が溶けて、色が混ざっていく。

僕に見えるのは、目を回して泡でも吹きそうな彼女だけだった。

げんなりしてベンチに腰掛ける僕と彼女。背を丸めて座る姿は、郷愁に浸る老夫婦のように見えるかもしれない。

二人ともよぼよぼと、コーヒークップを出てすぐのベンチへ吸い込まれるように座っていた。

これってデートなんだろうか？

初めての僕が言うのもただけど、一緒に楽しいことをしたり、おいしいものを食べたりするのをデートと呼ぶのではないのか？

僕たちはジェットコースターやコーヒーカップ、あえて苦手なものに挑戦してげっそりしている。

やっぱり僕は遊園地へ修行に来たんだと思う。

【ミスト】―指輪―

秋の陽気でぽかぽかと暖かい休日の昼下がり。多種多様な人々でごった返す城下町。人ごみの中をゆつくりと進む馬車。中を覗き込もうと跳びはねる子供。落ち着いた趣のあるレストランには長蛇の列。市場の方からは威勢のいい店主のかけ声が聞こえてくる。遠目に見える勇者と思しき一行には、砂糖へ群がる蟻のように人の波が押し寄せていた。肩がぶつかりそうなほどの人、ひと、ヒト。

そんな中、僕は羽の生えた少女と手をつないで歩いている。いや、引きずられている。

正面から来た子供が立ち止まり、妙なイキモノでも見つけたかのように、彼女をじつと見上げていた。

続いて上流階級と思しき貴婦人から舞踏会でもあるのか、と間違えて声をかけられる彼女。「違いますよ、たぶん」と苦笑いを浮かべながら、曖昧な説明をする僕。

彼女は何も言わず、前を向いたままずんずん歩いていく。

僕は彼女の格好を眺めるように後ろ姿をじつと見ていた。彼女はいったい何者なのか？ と。

たまに周囲へ顔を向けると、珍しいものを見るような視線とぶつかる。僕は少し目のやり場に困った。仮面でもかぶっていれば、舞踏会に行くと誤魔化せたかもしれない。

たっぷり二十分ほど歩いただろうか。

彼女はいったいどこへ向かおうとしているのか。そろそろ引きずられるのに慣れてきた僕は、久しぶりに口を開いた。

「えと、どこへ向かってるんです？」

前に行く彼女に聞いてみる。

反応がない。なおもずんずん歩いていく彼女。

ふいにぴたりと彼女の足が止まった。急停止で僕は彼女にぶつかりそうになる。

「アンタ、どつか行きたいとこないの？」

前を向きながら言う彼女。一瞬、誰か別の人に話しかけていると思った。

もしかして彼女はなんの予定もなく、ただ僕に町へ来いと言ったのか……。

ますますもって意味がわからない。彼女の目的はなんなんだ？

「特に、町で何かする用はないので……」

そう答えると、彼女はハアッと僕を尻目にしてため息を吐いた。

「そう。じゃあ私をどこかへ連れて行きなさい」

僕は彼女をどこかに案内しないといけないようだ。しかし、

「そう言われても、僕はほとんど町になんて来ませんから」

困ったな、と辺りを見回す。どこがいいのかなんてさっぱりわからない。正直、迷子にでもなりそうだ。

しばらく思案した後、

「それじゃ、市場なんてどうです？」

とりあえず稀に町へ来たとき立ち寄る商店街を勧める。

いいわよ、と短く返事をする彼女。

あまりお金を持ってなくて少し不安だけど、他に行く場所も思い当たらない。市場でいいだろう。「わかりました。行きましょう」と彼女の手を引く。

「ふーん。ほんとに行くのね」

僕は耳を疑った。彼女は、引つ張られながらそんなことを言う。

今『いいわよ』と言ったばかりではないか。彼女の中で“いい”

は“ダメ”という意味なのか？ いや、そうに違いない。

「えっと、やっぱり別の場所にします？」

手を頭に添えて記憶をたどり、他を考える。市場がダメとなれば――。

「いいわよ、別に」

ふふ、と笑いながら言う彼女。僕は何か面白いことでも言ったのか？

なんとなく“いい”を“ダメ”に置き換えてみる。『ダメわよ、別に』――意味がわからない。いいだ、こりゃ。

「そ、そう。じゃあ行きましょう」

困惑しながらも、再び彼女の手を引いていった。

市場をきよきよと見回しながら歩いていると、足を止めた彼女に引つ張られていた。

どうやら貴金属店に興味があるらしい。きらびやかで色鮮やかな指輪やネックレスが並ぶ店内に入った。

指輪の並びには、輝きを放つ宝石へ、とろけそうな視線を向ける女性客がいた。目線の先にある指輪をつけた自分自身の姿でも思い浮かべているのだろうか。

隣の羽の生えた彼女を見る。これまた、らんらんという音が聞こえてきそうなほど瞳が輝いていた。よだれでも垂らしそうな顔をしている、というのは言い過ぎかもしれないが。これまでの彼女との落差に、驚愕を通り越して恐怖を感じるほどだった。

僕はこういった店に入るのは初めてだ。なんら僕には関係のない場所だった。

宝石は確かに綺麗な石であることは認める。しかし、だからといってあんなにうっとりして眺めるのは理解できない。

「よし、これにする！」

いきなり彼女が声を上げた。指にはぎらぎらと紅いルビーが光を

放っている。僕の全財産を出したって買えるとは思えない。やはり彼女は貴族なのか？

と、そのままつかつか店の外に出ようとする彼女。

「ちょ、ちょっと！　まだお金払ってないですよ！」

あわてて彼女の手を引つ張りながら言う。店主が店の奥からゆっくりとこちらへ向かつてくるのが見える。

「そう？　じゃあアンタ払つていて」

にこやかにそういう彼女。もう指輪のことしか頭にないようだ。

「そんなぎらぎらしてるいかつい、買えるわけじゃないじゃないですか！」

「なによ？　こんな石ころも手に入れられないの？」

「僕には一生かかっても買えませんって！」

ダメねえ、と言つてため息を吐く彼女。たまらず『ダメ』を置き換えてみる僕。

さすがにその指輪は彼女がどうにかするしかない。

「お金、持っていないんです？」

「ない」

彼女はきつぱり、当然のようにけろつと言う。そういうことは早めに言つて欲しい。

店主の足音がもうそこまで迫っている。

「なら、その指輪は戻しましょう」

僕の言葉は聞こえていないのか、彼女の瞳がらんらんどころかぎらぎらした。口の端を吊り上げて不敵な笑みを浮かべている。

彼女の様子に、僕の頭でけたたましい警鐘が鳴り響く。嫌な予感が最高潮に達しようとしていた。

「合図、出すから」

店主を見ながら彼女がつぶやく。

「な、なにを言っ

「いち、にい——」

逃げた！

飛んだと言ってもいい。凄まじい速さで裏通りを駆けていく彼女。遅れて僕も全力で走り出す。

宝石泥棒をしたという事実。ひやりとした悪寒が頭から背中まで走り、全身の血が一気に引いていく気がする。

なぜ今宝石を盗んで逃げているのかわからない。頭がおかしくなりそう、声でも上げたくなる。

楽しそうにきゃあきゃあ叫んでいる彼女に、どんどん離されていく。僕は半狂乱になりながら後ろを何度も振り返る。

店主の手が肩に伸びる！

左後方から用心棒らしき大男が棍棒を振り下ろす！

目まぐるしく変わる状況に頭が追いつかない。しかし、かろうじてかわしていく。

また棍棒が頭をかすめる！

たまらず、うあっと短く声が漏れてしまう。

もうあまり彼女の姿が見えなくなってきた。後ろから店主の怒号。用心棒の魔法で発生している風が、轟々という音を立てている。

足に投げつけられた棍棒をかわす！

直後、渦を巻いて風が背中をかすめる！

「うあ、あ、あああ……あああああああ！」

迫り来る恐怖に、情けない声を上げ続けながら逃げていった。

結局捕まった。

取り押さえられていた僕に気づき、彼女も大人しく店まで戻った。店の隣にある倉庫で問い詰められた僕は、彼女が隣国の貴族というウソを突き通した。耳や羽のアクセサリー、着ているドレスがこんなところで役に立った。しかし、それでも不審すぎる。機転を働かせ、商品をひとつ買うことを条件に、なんとかおとがめなしにし

てもらった。

店の壁に背を預け、両腕をだらりとしたまま安堵の深いため息を吐く。魂も少し一緒に吐き出されたかもしれない。

「ふう、なかなか楽しかった」

けらけらと笑いながら彼女が言う。

「もう一度指輪をはめたまま、外に出てみようかな」

また、不敵な笑みを浮かべている。

まったく悪びれる様子のない彼女に、いい加減頭にきていた。

「こ、この……！」

拳を振り上げる。怒っていることを態度で表す。

彼女は一瞬ハッと驚いたように見えたが、

「まあいいじゃない」

ジョーダンよ、となぜかにこやかに笑っている。

どうせ僕が怒っても迫力なんてないし、たいして怖くないからだろうか。

拳を下ろす。彼女の楽しそうな顔を見ていると拍子抜けしてしまつて、僕までまあいいか、となつてしまつた。

ともかく僕はこの貴金属店でなにか一品買わなければならない。ヒゲを生やした店主が手もみして待ち構えている。

彼女の方を向くと、すでに目をきらきら輝かせながら僕を見ている。そして、展示品のひとつを指差している。

ふと、彼女のローブの下でせわしなく動いているものが目に留まつた。

なんなんだ、あれは……。

また頭がぐるぐるし出した僕は、額を押さえる。

とりあえず、ひとつずつ聞いていこう。

「それが欲しいんだよね？」

「いーえ」

物欲しそうな顔で指差してるくせに、どうしろと言っただ。

「アンタが私にプレゼントしたいんじゃないの？」

なるほど、そういうことか。

「……これクダサイ」

つべこべ言って長引かす前にさっさと購入する。

彼女が指差していたものは、黄色い地色に白い線の入った宝石で、店主の顔が渋くなるほど安価な指輪だった。

貴金属店を出た彼女は、真向かいにあるレストランに僕を引きずりながら入った。

テーブルの向かいに座っている彼女は、スプーンについたミルクを鼻歌まじりになめている。僕の紅茶はもうすでにないが、彼女はまだ口をつけていない。スプーンをなめながら、ただただ指輪を眺めるばかりだった。

「その指輪、そんなに気に入った？」

彼女の様子に半ばあきれ気味に聞く。

「んー？　そうでもないわよ」

僕は『そんなに気に入らない？』と聞いたんだ、たぶん。

それに、彼女のローブからふさふさした黒い毛の束がはみ出ている、左右に振られている。

「そう。しっぱ振るくらいうれしそうなんだけどね」

これはどう見てもしっぱだ。

彼女は指輪から僕に視線を移し、一気に紅茶を飲み干した。

「なによー？　気に食わないの？」

「そっいうわけじゃないけど」

「ならいいじゃない」

また指輪に向き直る彼女。確かに、コウモリの羽にネコの耳と、

いまさらしつぽのひとつやふたつ増えたところで大差がない。いや、しつぽは実際二本生えてるから、ぎりぎりだ。
まあいいか……。

いや違う、全然『まあいいか』じゃない。
彼女は明らかに魔物だ。

いきなり生えてしまつては、さすがにしつぽのアクセサリーとは言えない。幻覚で人間のように見せる魔法は聞いたことがある。しかし、人ごみで——しかも全員にずっと幻を見せるなんて到底できるはずがない。

きつと彼女は人に化けている。が、そんな高度な魔法を使う魔物は聞いたことがない。

それにしつぽは、彼女はいったいなにがしたいのか？
やっぱり目的がわからない。

しつぽの生えた彼女に目をやると、指輪を眺めながらティーカップをぐるぐる回して遊んでいた。
彼女の今までの言動を思い出す。

もしかして……これってデートなのか？

【勇児】——悲鳴——

気持ち悪くなつてベンチでうつむいている、見せ物カップルの僕と彼女。

多少回復してきた僕は、マントの上から彼女の背中に手を置いた。途端に、ビクッと背筋を伸ばす彼女。僕はそのまま彼女の背中をさすった。

彼女はあとかううとかよくわからない声を上げながら羽をばたばたさせ、肩を小刻みに震わせている。

「うう……やっぱり、勇児さんの半分はバファ。ンで出来てると思います」

僕の半分は風邪薬で出来ているらしい。顆粒タイプだろうか。

しばらくして、彼女が勢いよくベンチから立ち上がった。

「次はあれなんてどうですか？」

彼女が指差しているのはおばけ屋敷だ。窓ガラスが割れ、壁のコンクリートが薄汚れている。まるで本当の朽ち果てた病院のようだ。絶叫マシンの次はおばけ屋敷——彼女は同じ過ちを繰り返すつもりなのか。

「口から魂が出てたりはしないよね？」

「魂？ えとー？ 一寸先は、五分の魂？」

今回は正気みたいだ。

「おばけ屋敷なら大丈夫です。わたし、ホラー映画得意ですから！」胸を張って言う彼女。ホラー映画が得意ってどういうことだろう。「そっか。あのクマの乗り物もどうかな？」

半信半疑の僕は、軽自動車ぐらいの大きさの乗り物に顔を向ける。一メートルにも満たない子供が乗っていて、上下に揺られている。クマはただ手足をばたつかせてるだけだった。完全に子供向けだろう。

「あの、もしかして……おばけ、怖いんですか？」

「そんなことはないけど」

「わかりました。ではクマの乗り物へ」

何かを感じとったかのように、遠慮する彼女。

「いや、冗談だから。さ、おばけ屋敷に行こうか」

「そうですか？ わかりました」

思案顔の彼女の手を引っ張って、僕はおどろおどろしいおばけ屋敷に向かった。

淡い常夜灯が足元を照らす。深い闇と仄かな光で、廊下は暗い青色をしていた。静寂の中、僕と彼女の足音だけが響き渡る。誰もいない夜の病院。

からり――

からり――

僕と彼女の足音に交じって、かすかな物音が聞こえる。

僕は足を止め、音のした前方の曲り角へ耳を傾ける。

何も聞こえない。僕の心音だけが聞こえた。

また歩き始める。

からから――

からから――

足を止める。

物音も遅れてぴたりと止む。

僕はいつの間にか、彼女の手を強く握り締めていた。手には汗がじつとりと滲んでいる。

彼女に目をやると、全く平気というより上の空だった。園内をぐるぐる回っていた時と同じ、ぼんやりして心ここに在らずだ。

再び歩き始める。

物音は聞こえない。

曲り角が近づいてきた。音を立てて唾を飲み込む。そろそろ覚悟を決めなければいけない。彼女の方を向く――

顔があつた。

顔だけがあつた。

彼女の後ろに音もなく。

髪の高い女の顔だけが。

台車の上に真つ白い顔だけが。

首のない看護師。台車を持っている。

顔と目が合う。

顔はゆっくりと口を吊り上げた。

笑っている。

にやりと笑っている。

目を大きく見開いた。

音もなく笑っている。

「うあああああ！」

僕は絶叫を上げ、彼女の手を引っ張って走り出した。

「え？ え？ ええ？」

彼女は何が起こったかわからないような声を上げている。

僕は、前のめりになって走った。

曲り角を曲がる。

台車があつた。

顔が載っている。僕の手が届く距離に。
顔と見つめ合う。

時間が止まる。

顔が口を吊り上げてげらげら笑う。

「うおおあつ！」

遅れて僕も絶叫を上げる。

台車にぶつかりそうになりながらすり抜けていく。

駆け巡る恐怖が、手足をバラバラに動かす。身体を全力で走らせようとする。

廊下に這い回る足のない患者を跳び越し、霊安室の起き上がった死者をかわす。

「うあああ！ おおおおおつ！」

次々と襲い来る恐怖に、雄たけびを上げながら駆け抜けていった。

「あ、あの、その……」

彼女の声で我に返った。

おばけ屋敷の出口で、茫然自失のまま突っ立っていた。

やっぱりダメだった。僕は未だに幽霊の話を聞くと夜眠れなくなる。トイレに行くのも一苦労だ。おばけ屋敷は作り物だからと自分に言い聞かせたものの、ノックから悲鳴を上げてしまった。

意地を張らずに、クマの乗り物にしておけばよかった。

ふと、彼女の声が僕の肩から聞こえたことに気づく。彼女は抱き

上げられた猫のように縮こまっている。

冷や水を浴びせられたように覚醒した。

「あ……ごめん」

「い、いいえ！ そんな、滅相も、ございません」

首を横に振っている彼女を下ろす。

おばけ屋敷で駆けずり回っている間、無意識に彼女を抱きかかえて走っていた。

急に恥ずかしさが込み上げてきた。

おばけ屋敷でずっと悲鳴を上げていたなどと、羞恥で身悶えしたくなってくる。

彼女は両手を前に組んでうつむいていた。

僕は手の平を見る。

服越しに感じた肌のやわらかな弾力。かすかに聞こえた胸の鼓動。

あたたかな体温。

両手と胸に彼女を抱きかかえた感触が残っていた。

今度は僕の胸が悲鳴を上げているようだ。

【ミスト】―天空の塔―

指輪を眺めて座っている、しっぽの生えた彼女。

彼女が魔物だと疑っている僕は、イスから立ち上がると彼女の横に立った。無造作に彼女のネコのような耳に触れる。

途端に、ビクッと背筋を伸ばす彼女。僕はそのまま彼女の耳をさすった。

彼女は「ちょー！ や、めなさいよ」と羽をばたばたさせ、しっぽをフリフリ、肩を小刻みに震わせている。

「やっぱり」

彼女は魔物だろう。

黒いネコの耳、コウモリのような翼、黒いしっぽが二本。

たぶん、僕は彼女を知っている。

でも、確証がない。

彼女が勢いよくイスから立ち上がり、僕の手も跳ね上がる。

「なにが……『やっぱり』よ！」

ぱしんと乾いた音がレストランに響き渡る。僕の首が六十度回転していた。遅れて、頬からひりひりとした痛み。

「ふん！ とつとと行くわよ！」

そっぽを向いて店から出る彼女を、呆然と頬に手を当てて見ている。

「次はあれ」

彼女が指差しているのは、天空の塔と呼ばれるものだった。赤茶けた重厚な外壁にはツタがまとわりついている。長い年月であちこちが欠けて変色し、黄色がかった塔は首が痛くなるほど高い。天ま

で伸びるという表現がぴったりだ。大昔の戦で造られた過去の遺物らしい。

「塔には入れないよ」

今は使われていないとは言え、一般人の出入りは禁止されているはずだ。

それにもう、彼女の言うことを無理して聞く必要はない。むしろ、一刻も早く彼女を連れて町から出たい。

「そう。行くわよ」

僕の手を引っつかみ、どんどん塔に向かう彼女。

僕の声は聞こえてないのか？

「塔に入っただけにするつもり？」

「決めてない」

今回も気まぐれみたいだ。

「塔の中は魔導兵が警備してるらしいけど」

魔法で動く鎧が四六時中巡回していると子供の頃に教わった。武器は持っていないらしいが、捕まればやっかいだろう。

「そう。行くわよ」

僕の声は彼女の耳には届かない。ネコは耳が悪いんだ、たぶん。もうすぐ塔の入り口に着きそうだ。

「心配しなくても大丈夫よ。魔導兵は得意だから」
胸を張って言う彼女。

魔導兵が得意ってどういうことだろう。嫌な予感しかない。

「そ、そう……あの木馬なんてどうかな？」

悪寒がした僕は、クマぐらいの大きさの木馬に顔を向ける。小さな子供が乗っていて、前後に揺られている。ただ揺られている。子供は手足をばたつかせて楽しそうだった。完全に子供向けだろう。

「アンタ、バカにしてんの？」

「そんなことはないけど」

「さっきから様子が変わね？ どてかばちゃ」

何かを感じとったか、足を止めて僕を尻目に問い詰めようとする

彼女。

「いや、ジョーダンだから」
「ふうん。そう」

彼女は怪訝な表情を浮かべながらも僕の手を引つ張り、天空の塔へと向かった。

遠くの窓から差し込む光が足元を照らす。深い闇とかすかな光で、あたりは暗い赤色をしていた。静寂の中、僕と彼女の足音だけが響き渡る。誰もいない石造りの回廊。

カシャ――

カシャ――

僕と彼女の足音に交じって、かすかな物音が聞こえる。僕は足を止め、音のした前方の曲り角へ耳を傾ける。息を切らしながらも休み休み六十四階まで塔を登ってきた。ここまできて近くに魔導兵がいるらしい。

音は遠ざかっていった。

もう何も聞こえない。聞こえるのは僕の心音だけだ。また歩き始める。

ガシャン――

ガシャン――

いきなり聞こえ出した物音に足を止める。かなり近い。

僕はいつの間にか、彼女の手を強く握り締めていた。手には汗がじつとりと滲んでいる。

彼女に目をやると、全く平気のようだった。早く行けとばかりに、ジト目で僕を見ている。

鎧の音が聞こえなくなったのを確認して、再び歩き始める。物音は聞こえない。

曲り角が近づいてきた。音を立てて唾を飲み込む。魔導兵と出くわさないのを祈るしかない。

覚悟を決めて、彼女の方を向く――

鎧がいた。

彼女の後ろに音もなく浮かんでいる。

頭のない鎧。

盾を持って構えている。

鎧はゆっくりと腕を振り上げた！

「しまった！」

僕は彼女の手を引っ張って駆け出す。

「あら？」

彼女はきょとんとしていた。

僕は前のめりになって跳びだすように曲り角を曲がる。

鎧がいた。

僕の手が届く距離に。

時間が止まる。

鎧が盾を振り上げる！

「うぉあぁっ！」

僕は驚愕で絶叫を上げる。

「よっ」と

拍子抜けするような声が後ろから聞こえた。

鎧の動きが止まり、周囲の空気が凍てつく。瞬く間に全身が分厚い氷で覆われていた。

彼女が凍った鎧を蹴飛ばす。

手足がバラバラになって吹っ飛ぶ。

壁にぶちあたり、大音響を上げて散らばる鎧。

目の前で起こった光景に、僕は口をあぐり開けて突っ立っていた。

助かった、がこれでいいのだろうか……？

彼女は凍った鎧を蹴り回して遊んでいた。背後に迫っていた魔導兵の成れの果ても混じり、やかましい音を立てている。

もしかして、壊した鎧は僕が弁償するのか？

ガシヤンガシヤンガシヤン！

ガッシャッガッシャ！

下の階から鎧の迫ってくる音が続々と聞こえ出した。

彼女に目をやると、にこやかに手もみしている。

全部ぶっ壊す気だ……。

ぞくぞくと背筋を冷たいものが駆け巡る。

「ちょ、ちよっ」と！

不服な声を上げる彼女の手をひつつかみ、有無を言わず上を指して走り出す。

「おおおおおっ！」

次々と襲い来る鎧の腕を避け、雄たけびを上げながら駆け抜けていった。

「なんなのよ、まったく」

荒く息をつきながら、彼女の声に顔を上げる。

彼女は頬を膨らませていた。まるでオモチャを取り上げられた子供のような顔だ。

天空の塔、最上階。

ここまで無我夢中で突っ走った。あれだけの数の魔導兵を弁償なんて、夜も寝ずに働かなければなくなる。彼女が破壊した二体を弁償するだけでも一苦労だ。魔導兵がいたところでどうせ老朽化して朽ち果ててるだろうと勝手に思い込んでいたが、そんなことはまったくなかった。しかもあれほど大量に出くわすとは……。

無理やりでも、塔の入り口近くの木馬にしておけばよかった。

息を整えながら周囲を見回す。最上階は展望台のように広々としていた。テーブルや長椅子、望遠鏡まで備え付けてある。

空が近い。肌寒い風が、ひゅっひゅっとうと空気を巻き込みながら吹き抜けていく。

手すりから町を見渡す。地上から見上げていた城が見下ろせた。町並みは屋根ばかりで、雑踏では人が小さい点となって蠢くように行き交っている。

振り向くと、彼女が長椅子に座っていた。隣をばんばん叩いている。

座れということか。

苦笑いにも似た笑みを浮かべ、イスまで歩み寄る。

子供っぽいところはちっとも変わってない。

もし彼女が“彼女”だったなら、きっと僕は――

【勇児】――衝動――

おばけ屋敷で無意識のうちに彼女を抱きかかえていた僕は、恥ずかしさで身悶えしそうになりながら出口で突っ立っていた。

沈黙が流れる。

胸の鼓動だけが鳴り響いていた。

彼女が面を上げ、僕に微笑みかける。

「お腹、空きませんか？」

「え？ ああ。じゃレストランに」

時刻は午後四時三十分をまわったあたりだ。腹はあまり空いていないが、とにかく何かして落ち着きたかった。

レストランに向かって歩き出そうとする。

彼女が僕の手を取ったまま、立ち止まっていた。

「あの。わたし、お弁当作ってきたので、よかつたら……」

はにかんでそう言う彼女。

「そつか。じゃあそのベンチに」

端的に返事をする。もし今『ありがとう、うれしい』なんて言うものなら、本当に身悶えしてしまいそうだった。

僕は深呼吸を繰り返しながら、近くにあったベンチに座る。

彼女は遠慮がちに僕の隣へ腰を下ろすと、カバンから青い包みに入った小さめの弁当箱を取り出した。

彼女がフタを開ける。弁当箱の中は一面黄土色だった。

彼女はスプーンですくうと、じゃがいもやにんじんと思しきものが中から顔を見せ、ご飯の上ののっていた。

「カレー？」

「はい。わたし、カレーしか作れない体質で」

肉じゃがを作ると、くしゃみが止まらなくなったりするんだろう

か。

彼女は、スプーンでカレーをすくったまま、こちらを見ている。

「ど、どうぞ……あーん」

自分の口をあーんと開けた彼女が、僕の顔にスプーンを近づけている。

包みを見ても他にスプーンは見当たらない。初めから僕に食べさせるつもりで作ってきたみたいだ。

カレーの載ったスプーンを下目で見ながら口をへの字にして躊躇する。これまでとはまた違った恥ずかしさだ。

視界の隅。おっちゃんがあーんと口を開けている。おばちゃんが顔をしかめる。ちっちゃい子供が「きつと毒入りだよお」と言いながら跳びはねている。おじいさんが無表情に僕を見つめる。そして、そんな様子も知らずに彼女が泣きそうな顔で僕を見ている。

ああ、もうだめだ……。どうせ僕は人の厚意を断れない。

観念して小さく口を開く。たぶん、周りからさぞかし僕の顔は間抜けに見えるだろう。おじいちゃんと目が合った。引き続き無表情だ。

スプーンが震えながら僕の口に入ってくる。舌の上に冷たい金属の感触。どつくいりい、どつくいりい、と子供の声が聞こえる。

「ふふうんほっへ」

「え？ えーと？」

彼女の手を取り、スプーンを僕の口から抜きとった。

自由になった口でカレーを噛み締める。冷めたご飯、弾力のあるにんじん、少し硬めのじゃがいも、ルーの滑らかな食感、スパイスの辛さがほんのりと口の中に広がる。

「……どうですか？」

僕を上目に、彼女がカレーの味を聞いてくる。

「家庭的な味、かな」

そ、そうですかと彼女が恥ずかしそうに下を向く。おっちゃんが頬を赤らめる。

おいしいとは言わなかった。まずくはないが、美味いわけでもない。

お手本通りの材料、市販の固形ルー。隠し味なんてものも感じられない。僕が初めて作ったカレーとよく似た味をしていた。

僕の感想に胸を撫で下ろした彼女は、二杯目のカレーをすくっていた。

あーん、で全部食べさせるつもりか……。

にいづまー、おさなづまーと子供のはやしただてるような声が聞こえる。

こうして、新たな羞恥の試練が始まった。

頬を上気させながらも、冷めたカレーをなんとか食べきる。

彼女は上機嫌で弁当をしまっていた。鼻歌でも聞こえてきそうだ。

「あ、そうだ」

彼女は何か思いついたように言った。

「最後に観覧車、乗りませんか？」

そう言つて、彼女は目を細める。これまでのぼんやりした様子や緊張でどもることもなかった。

「だんだん速度が上がって、頂上で逆さまになるとか……ないよね？」

僕はいつの間にか疑り深くなっていた。

彼女は微笑んだまま首を横に振ると、僕の手を取り引っ張っていった。

「とりあえず、助走は要らないから」

「あ、そうなんですな」

観覧車にようやく乗り込めた僕と彼女。彼女は乗り込もうとして二度見送った。

彼女と向かい合って座る。

僕は外の景色を眺めていた。

遠くに見える夕日と、それを映す海。緑の生い茂る山は山吹色。大小さまざまなビル、商店街、住宅、行き交う車、長細い電信柱。街が黄色く染まっている。

窓に映る彼女は、僕と同じように外を眺めていた。

校内で何度か見かけたことがあるだけのかわいらしい女の子。それが今、観覧車で一緒に座っている。

彼女はなぜか僕のことを好きみたいだ。

僕は彼女をどう思っている？

『懐かしい』

夕焼けに染まる彼女は一枚の絵のようだ。

夕日を映す瞳は赤く輝き、栗色の髪が黄金色に染まっている。

『もう一度触れたい』

衝動が渦巻く。

じわり、じわりと胸を締め付けられるような感覚が広がる。

胸の奥から堰を切ったように流れていく。巡っていく。染み込んでいく。

『抱きしめたい』

手が震え出した。

僕の中で何かが打ち震えている。

止まらない。止められない。止めたくない。

こみあげるのは、どうしようもなくあたたかいもの。

『彼女のぬくもり』

この感情はいいなんなんだ？

【ミスト】——さよなら——

天空の塔最上階。

長椅子の彼女の隣に座る。

僕は何も話さないで、彼女のことを考えていた。

沈黙が流れる。

風の音だけが鳴り響いていた。

彼女が僕に微笑みかける。

「アンタ、お腹空いたでしょ？」

「ああ、そうだね」

時刻は午後五時三十分をまわったあたりだ。腹はまだあまり空いていない。

「しょうがないわねー」

そう言ってローブから包みを取り出した彼女。どうもはにかんでるようだ。

赤い布の包みから箱が出てきた。

彼女がフタを開けると、中は一面黄色だった。

なにかの食べ物、か。とりあえずこれは、夕食だろう。

「もしかして、作ってきてくれたのかな？」

「何言ってるの、たまたまよ」

僕のために作ってきてくれたみたいだ。

「そう。ありがとう、うれしい」

微笑むと、彼女は「うっ」と呻いたまま固まっていた。身悶えしてしまいそうな彼女は、見ていて楽しい。

彼女は深呼吸を繰り返しながら、スプーンで料理をすくった。
かぼちゃの……なんだろう。

「かぼちゃ？」

「どてかぼちゃのスープよ、どてかぼちゃ」

僕のことを言ってるのか、かぼちゃのことを言ってるのかわからない。

彼女はスプーンを持ったまま、僕を睨みつけている。

「ほら、口開けなさいよ」

彼女が僕の顔にスプーンを近づけている。

包みを見ても他にスプーンは見当たらない。初めから僕に食べさせるつもりで作ってきたみたいだ。

彼女は泣きそうな顔で僕を見ている。

小さく口を開く。たぶん、僕の顔はさぞかし間抜けに見えるだろう。誰もいないのが幸いだった。

スプーンが震えながら僕の口に入ってくる。舌の上に冷たい金属の感触。

「ふふうんほっへ」

「なに言ってるの？」

彼女の手を取り、スプーンを僕の口から抜きとった。

自由になった口でかぼちゃを噛み締める。いびつな形で明らかに火が通っていないかぼちゃの硬い食感、ざらりとした砂の感触、とんでもない辛さと吐き出したくなるような苦味が口の中いっぱいに広がる。

耳から何かが出そうだ。

「どう？ おいしいでしょ？」

僕を上目に、彼女がかぼちゃの味を聞いてくる。

「おいしいよ」

ふふん、と彼女は満足げに、どこか恥ずかしそうに下を向く。

まずい。今すぐにでも吐き出したい。

材料のどてかぼちゃは素手で叩き割っただけかもしれないし、まったく言っていないほど火を通していない。スープにはなにが入っているかわからないが、とにかく辛くて苦い。かぼちゃの味なんて

感じられない。

彼女は料理なんて作ったことはないだろう。

僕の感想に気を良くした彼女は、二杯目のスープをすくっていた。全部食べさせるつもりか……。

こうして、僕の壮絶な試練が始まった。

嗚咽を堪えながらも、かぼちゃをなんとか食べきる。

彼女は上機嫌で包みをしまっていた。鼻歌でも聞こえてきそうだが、彼女に見えないように、ひりつく喉へ冷たい空気を手で扇いで送る。

僕は長椅子から景色を眺めていた。

遠くに見える夕日と、それを映す海。緑の生い茂る山は山吹色。

大小さまざまな建物、城、教会、商店街、住居、行き交う人。町が黄色く染まっている。

いつの間にか、彼女も僕と同じように黄色い景色を眺めていた。

僕の前にいきなり現われた少女。自由奔放できついところもあるけど、どこかかわいらしい女の子。それが今、僕の隣に座って夕日を見ている。

僕は彼女のことを知っている。

そして、彼女のことを好きだった。

「どてかぼちやのスープ」

僕は懐かしむようにつぶやく。

「ずっと僕に食べさせたかったのか」

彼女は答えない。

夕焼けに染まる彼女は一枚の絵のようだった。

夕日を映す瞳は赤く輝き、赤い髪が黄金色に染まっている。

彼女の髪に触れる。指が滑らかに金の髪を流れていく。

彼女はこそばゆそうに目を細めている。

「おかえり」

彼女は答えない。

彼女と過ごした懐かしい日々が思い浮かぶ。

じわり、じわりと胸を締め付けられるような感覚が広がる。

胸の奥から堰を切ったように流れていく。巡っていく。染み込んでいく。

「会いたかった」

彼女は答えない。

彼女のぬくもりを思い出す。

僕の中で何かが打ち震えている。

こみあげるのは、懐かしくてどうしようもないあたたかさ。止まらない。止められない。止めたくない。

僕は彼女を抱きしめていた。

この手に、腕に、胸に、彼女のぬくもりがあたたかい。

ずっと求めていたぬくもりがあたたかい。

「一緒に帰ろう」

彼女は困ったような表情を浮かべ、首を横に振る。

そっと、やさしく僕の胸を押しつける彼女。

「さよなら」

僕に背を向け、出口へ向かう。

追いかけてようとする僕を制するように後ろへ手を向ける。

彼女は夕日を背に歩き出す。

そして振り返る。

「いつか、きっと」

微笑む彼女の目には、涙が浮かんでいた。

突然、彼女の瞳が驚愕に染まる。

見開かれた目が苦悶の色に変わった。全身を小刻みに震わせながら膝をつく。紫の電流が体中から飛び散っていた。

彼女が顔を向けた出口には人。三人いる。

杖から紫の火花が散っている老人を睨みつける。彼女に雷を放ったのはコイツだ。

先頭に立つ男の腕から白く眩しい光が発せられていた。まるでそこに太陽があるかのようなうだ。

やがて光が丸い球形を取っていく。どう見ても彼女を傷つけるための魔法だった。

彼女に向かって駆け出す僕。

彼女は震える足で立ち上がろうとする。

瞬く間に大きくなっていく白い球体。清らかな光。

彼女は膝をつく。

光が男の腕から放たれた。

彼女はただ震えている。

あと少しで彼女に僕の手が届く。

光が音もなく彼女に向かって突き進む。

彼女は動かない。

伸ばした手に彼女の肩が触れる。

彼女は白に覆われる。

——僕に選択の余地はなかった。

思い切り突き飛ばす。

光の外まで飛ばされたことを確認する。

視界を覆う光。

ぞっとする暖かさ。

僕を食らい尽くそうとする。

禍々しい白。

手が、足が、体が、内側からバラバラにはじけとぶ感覚。
彼女が何か叫んでいる。

もう聞こえない。

世界が塗りつぶされていく。

白く、黒く――

僕が最後に見たものは、いつかの彼女の姿だった。

【ミスト】―彼女―

「今日からお隣で暮らすことになったミスト君だ」

村長の娘は、白いドレスの裾を上げ、うやうやしくおじぎをする。

「アイシヤです、よろしくね」

彼女と初めて会ったのは僕が十二歳の頃だった。

「……………」

それは、僕が両親を亡くして二週間後のことだった。

「なんで私がこんなこと」

彼女は村長に言われて、僕の新しい家を整理しに来た。数日前まで彼女が住んでいたそうだ。ぶつぶつ文句を言っている。

彼女は村長の前とは態度が随分と違った。乱暴に雑貨類を蹴飛ばす。

「アンタ、棚の上のビン下ろしといて」

何をするでもなく、イスにうずくまって窓の外を眺める。

僕の瞳には外の景色なんて映っていなかった。

「聞こえてないの？」

僕の耳を右から左に通り過ぎていく。

親がいなくなった後には、ただ虚しさだけが残っていた。

「ちよつと、耳ついてんのよね？」

彼女は僕の耳を無造作に引つ張る。

僕にはどうでもいいことだった。

「もお、なんとか言いなさいよ」

いきなり視界いっぱいには彼女の顔が映る。金色の髪が僕の頬をかすめる。

僕はたじろいだ。

「…………… なんとか」

何を言えいいのかわからなかった。

「こ、この！」

頬つぺたをつねられる。痛い。

でも、怒ってる彼女がなんだか可笑しくて。

僕は無意識に微笑んでいた。

「な、なに？　そういう趣味でもあんの？」

つねったまま、彼女がうろたえている。やっぱり可笑的い。

僕は親がいなくなっても泣かなかった。でもそれは、乗り切ったからじゃない。

何も話さない、聞かない、感じない、考えない——ふさぎこんで事実をちゃんと受け入れていないだけだった。

僕の奥底で眠っていた感情が目覚めます。

止まっていた時間が動き出した。

微笑む目に涙が浮かぶ。

感情をせき止めていた壁に亀裂が入る。決壊する。

頬に涙が伝っていた。

流れ込む事実を止められない。

雪の降る冬、家の暖かさ。もう二度と触れられない、感じられない。

間抜けなことをして僕に怒られる父、くすくす笑う母。もがいても暴れても大声で泣き叫んでも、あの頃に帰ることはできない。

三人で笑いあう夕食。いくら望んでも時間は戻らない、どうにもできない。

流れ出した感情が止まらない。

喉から嗚咽が漏れる。

「ちょ、ちよっと！」

僕は彼女に抱きついていて。

「なに、を……」

声を上げて泣く。顔をくしゃくしゃにしてしゃくりあげる。

彼女はされるがまま、ずっと僕にしがみつかれていた。

このときから彼女はなにかにつけて面倒を見てくれる。ひとつ年下の僕は、彼女の弟のようになった。新しい家族が出来たみたいでうれしかった。

「ちょっとアンタ」

こそそと背を丸めて家へ入ってきた僕は、突き刺さるような視線を感じた。

「またなんか拾ってきたでしょ？」

ダメだ、完全にバレてる。

「虫はやめてよね……で、今度はなに？」

「虫じゃないよ、ということで」

そそくさとリビングに向かう。

「なにが『ということ』よ。いいから見せなさい」
後ろから肩をつかまれた。

お手上げだ。彼女が僕の腕の中を覗き見る。

「なにそれ？」

「えーと……魔物、じゃないかな？」

「ま、魔物って！ アンタなに考えてんの！」

「いや、だってほら、ケガしてるし」

「手負いの魔物なんてもつと危ないじゃない！」

「大丈夫だよ。手、噛まれたけど痛くなかったし」

右手の人差し指を見せる。少し血がにじんでいた。

「いいから、元の場所に戻してきなさいよ」

彼女は心配してるのか怒ってるのか、よくわからない表情をしていた。両方が。

「そう言われても。それにここ、僕の家なんだけど」

「元は私の家でしょ！」

理屈の通らないことを言う彼女。

「もう二年も前の話じゃないか。だいたいなんでアイシャが僕の家にいるんだよ」

「つべこべ言わずにとつと捨ててきなさい！」

最後にはいつもこうだ。

でも今回は彼女の言うことを聞くわけにはいかない。
ベッドに向かう。

「ほら、その棚から薬草取って」

「ちよつと、聞いてんの？」

「聞こえてるよ、右から左に」

「聞き流してんじゃない！」

「そうとも言っかな」

適当にあしらいながら魔物の手当てを始める。

「あーっもお！ 付き合つてらんない！」

「へえ、アイシャは僕と付き合つてたのか」

なっ、と声をつまらせて固まる。そんな彼女が可笑しくて仕方がない。

彼女をからかうのは楽しかった。僕の趣味だ。

「あ、アンタなんて弟よ！ ただの奴隷、拾ってきた犬よ、犬！」

まくしたてる彼女。

弟か。僕はそう思っちゃいない。

「そう言えば、もう僕の方が背はあるな」

彼女の身長は高かった。

でも、ここ一年で僕は急に背が伸びて、いつの間にか追い越して
いたみたいだ。

「おかあちゃん、なんて抱きついてきたくせに」

「言ってない言ってない」

今ではもう昔の話。恥ずかしい笑いの種だ。

ここでの生活は楽しい。

以前のことは、ほとんど思い出さなくなった。

ゆるやかに過ぎ行く毎日。
僕は幸せだった。

秋の夕暮れ。

畑中に響き渡りそうな彼女の声が聞こえた。
手を休めて彼女に歩み寄る。

「かぼちゃってどこにある？」

「村の西から三キロ先にある、山の方の畑だよ」

「そう、ありがと」

「まだ収穫には早いけど、なにするつもり？」

「ないしょ」

そう言っ てきびすを返す彼女。

僕にはなんとなくわかっていた。

食あたりに効く薬を準備しておいた方がいいだろう。

彼女の後ろ姿を見つめる。肩まで伸びた金色の髪が風にたなびいていた。

彼女は今年で十六歳になる。そろそろ年頃だ。

彼女が誰かと添い遂げるなんて、そんなこと想像もつかない。

彼女のいない生活など、僕には考えられなかった。

周りがダメだと言うなら、彼女と別の土地へ移り住んだって構わない。

これからもずっと一緒だと思っている。

……これじゃ、まるでプロポーズじゃないか。

この分だと、今夜は何か口走ってしまうかもしれない。

* * *

頬に冷たいものが当たっている。

吹き荒ぶ風。かすかに教会の鐘の音が聞こえる。

背中には冷えた石畳の感触。

視界には一面の真つ暗な夜空。白い点がひらひらと舞い降りる。

雪が降っていた。

秋のこの時期に雪なんてありえない。

僕は地面に仰向けになって寝ていた。

——ここはいつたどこだ？

記憶をたどる。

僕は白い光に体の内側から打ちのめされたはずだ。

起き上がってあたりを見回す。

確かにここは天空の塔の最上階だ。

しかし、誰もいない。

足元の地面には、血が固まってこびりついていた。これは僕のものなんだろうか。

五メートルほど先に黒い布のようなものが落ちていた。

歩み寄って取り上げてみる。

彼女の着ていたものだ。

——なぜ彼女の服が落ちている？

嫌な予感が広がる。脈打つ音が早く、大きくなっていく。

服の落ちていたあたりで何かが淡く光っていた。

思わず拾い上げる。

彼女にあげた指輪だった。

嫌な予感は絶望に変わる。早すぎる鼓動が眩暈を引き起こす。

突然、手の平に置いた指輪が強く光りだした。

明滅を繰り返しながら広がる。

まぶしい光が僕を飲み込んでいく——

【ぱんなこった】——記憶——

——これは私の記憶

出会いと穏やかな日々思い出——

* * *

「魔王だ！ 魔王が攻めて来たぞ！」
「魔物が来るぞ！ 早く鐘を鳴らせ！」
「早く家に入って扉を閉めるんだ！」

数多の同族を率い、村を襲う。

生きるためには仕方が無かった。
森が焼かれ、棲み処を追われていく。
人は魔物を殺していく。ただ危険だからというだけで。ただ醜いからというだけで。ただ己の欲望を満たすために——

森を追われた私は、散り散りになった同族たちを集めた。
村を襲い、食料を奪う。

私は率先して危険な人間を引き付けた。それ以外の人間は家の中に隠れる。

日を追うごとに付き従う同族たちは増えていく。

私はいつしか“魔王”と呼ばれるようになっていた。

私は河原に倒れていた。

どこまで流されてきたのだろうか。

同族たちはみな殺されてしまったかもしれない。

魔力が体から抜け落ちていく。

気高い黒豹の姿が保てない。小さな猫になっていた。

凍えるような風が私を突き刺し、吹き抜けていく。

私にはもう、何かをする気はない。

倒れこんだまま、身動きひとつしない。

甦るのは、耳にこびりついて離れない音。棲み処が燃えて灰になつていく音。逃げ惑う同族が剣で刺し貫かれる音。怨みの咆哮を上げながら空へ消えていく音。げらげら笑う人間の声が木霊する。

魔物はただ人間に殺されるために生きているのか。私はいつたйнаぜ生まれてきた？

この胸に残るのは――虚しさ。

頭に響いていた、いつかの狂喜の音も遠ざかる。

私はここで朽ちていく。

「生きてるか？」

上から声が聞こえる。歳若い声だ。

近隣の村人と思しき男が、前屈みになって私に手を差し出そうと
していた。

力が入らない。

ただ人間を力の限り睨みつける。

「なんだ、睨んでるのか？」

人間が私の体に触れる。

「おまえ魔物か」

私の羽としつぽに気がつく。

私は人間など信じない。

私の誇りにかけて、せめて一矢報いる。

残されたわずかな力で指に噛みついた。

「痛ッ」

噛んだ指から血が滴る。これが精一杯だった。

魔王と呼ばれた私は、ただの村人にトドメを刺されて終わる。

「傷薬塗ってる間ぐらいじっとしてなよ、まったく」

私は信じられなかった。

この人間は何を言っている？

薄れていく意識。

私の体が持ち上げられていた。

あたたかい。

私は抱きかかえられていた。

「もうすぐ家に着くから。しっかりしろよ」

投げかけられた言葉に、こくと頷く。

それを最後に、私は意識を失った。

金の髪が揺れる。目の前には顔。

「あ、目覚ました」

人間の女だ。澄んだ黒い瞳には、猫になった私の姿が映っていた。私の鼻の頭をつんつん指先でつつく。興味深げにあちこち触れてまわる。

敵意は感じられなかった。

女は隣の部屋へ行く。

私は木箱に毛布を敷き詰めて寝かされていた。

ここは民家の寝室のようだ。ベッドが置かれてある。

「これどうかな？」

「さあ、魔物なんて飼ったことないからね」

女が私を抱き上げた男と一緒に入ってきた。

鼻先に白い液体の入ったスプーンを突きつける。

この二人は魔物の私にいったい何をしようというのか？

「やっぱりミルクはダメみたい」

「アイシャ、怖がられてるんじゃないの？ 毒入ってそうで」

「えー？ そうかな」

「僕に貸して」

どうやら私に餌を与えようとしているようだ。

どのみち回復するまでは従うしかない。

差し出されたスプーンをなめる。

「ほらやっぱり」

「な、なんで……」

「日頃の行いだよ」

「関係ないじゃない。もう一回やってみる」

女が鼻息を荒くしてスプーンを差し出していた。

思わず顔を背ける。

「ほらやっぱり」

「くっ……アンタ、なんかしたんじゃないの？」

「日頃の行いだよ」

「おんなじセリフばかり繰り返してんじゃないわよ！」

「お、結構飲むな、おまえ」

「ちよっと、餌あげてないで話聞きなさいよ」

女がアイシャで男の名はアンタらしい。この二人は夫婦——いや、姉弟だろうか。

魔物の私をまるで拾ってきた猫と同じ扱いをしている。こんな人

間には初めてお目にかかった。

私はその夜、久方ぶりの眠りにつくことができた。

一ヶ月が経った。

「あ、こらっ」

食卓の皿の上にあった魚をくわえる。アンタではなくミストの夕食だ。

拳を振り上げて追いかけてくるが、ミストはまったく怖くない。とりあえずキッチンを逃げ回ってやる。

「修行が足りないのよ」

「そう言って僕の晩御飯をつまむのはやめてくれ、アイシャ」

「修行が足りないのよ」

「こらまで！ ぱんなこった」

「ちよつと、無視しないでよー」

私はアイシャに“ぱんなこった”と名付けられた。

「おんなじセリフばかり繰り返してんじゃないわよお」

「……それ、私のマネ？」

「ああ！ ベッドの上に魚を引きずるのはやめろ！ 染みがつくじゃないかっ」

「くぅ……いいわよ、もうひとつ食べてやるから」

毎日が楽しい。

私の傷はほとんど完治している。

しかし、私はこの家から出るつもりはなかった。

魔物として生きてきた私には、夢のような時間だった。

二ヶ月が経った。

今の私を誰が魔王だと思うだろうか。

「ほんと、この子は魔物とは思えないわね」

私はただの飼い猫として生きている。
猛き豹としての誇りなど要らない。

今日も夕食後の心地良いうたた寝に浸る。

「赤ちゃんみたいだな」

「なつなに言ってるのよ……」

「何か恥ずかしくなるようなこと、言った？」

「し、知らないっ」

ここには安らかな時の流れがある。

いつまでもここで二人と過ごしていきたい。

私にはこれ以上何も望むものはなかった。

半年が経った。

今日はなかなか夕食にならない。

それどころか、部屋に明かりすらもっていない。

ミストは食卓のイスでなにをすることもなく、腰掛けていた。

怪訝に思った私は、ミストの足にからみつく。

「魔物……」

抱き上げられた。

瞬間、首をぎりぎり絞めつけられる。たまらず口が開いて舌が出た。

見上げる先には、恐ろしい顔。これはミストではない。あのやさしい瞳が、戦慄を覚えるような顔に変わるはずがない。闇夜に目の形をした鈍い色の光だけが浮かび上がる。

怖い。舌が震える。止まらない。怖ろしい。殺される。ころされる。

「ああ……ごめんよ」

喉が解放される。ミストに戻っていた。だが、顔に表情がない。
ミストは私のミルクを注ぐと、またイスに座って外を眺めていた。
夕食がない、明かりのとまらない部屋、魔物、ミストの表情――

アイシャがない。

私は何が起こったか理解した。

一週間、ミストの様子は変わらなかった。

そして住んでいた家を後にし、私を連れて人里離れた古い家屋に移り住んだ。

さらに半年が経った。

今でもときおり、ミストはぼんやりと外を眺めてアイシャの名をつぶやく。

あの暖かな空気はここにはない。乾いた風が流れる。

安寧で、しかし冷えた時間が過ぎてゆく。

私はミストの元を離れる。

私にはひとつだけ思い当たるものがあつた。

私は旅に出る。

失われたものを取り戻すため。

【魔王な彼女】——思い出——

——これは私の記憶

私が“私”になった日の思い出——

* * *

ここはミストとの思い出が詰まった部屋。昔の私の家。主がいなくなつて、もう二年が経つ。冷えた空気が胸を締めつける。

ぱんなこつたは私を蘇らせてくれた。

でも私は“私”じゃない。

鏡に自らの姿を映す。

赤毛のショートカット、きりつとした瞳、そして背が低かった。

私はぱんなこつたと混じり合っていた。容姿だけじゃなく、記憶、考え、魂に至るまで。

ミストに初めて会った時の服がぴったりだった。なんか、子供に戻った気分……。

一度失われたものを完全に蘇らせるなんて、そう都合良くはいかない。

私はぱんなこつたの記憶を頼りに、ミストのいそうな場所へ向かった。

辛気臭い夜の山道を歩く。

こんなとこ毎日通ってたら気分が滅入りそう。秋なのに冬みたいな感じがする。

ミストがいた。

寂しげな後ろ姿に胸が締めつけられる。私がいなくなって二年も経ってるのに、まだ引きずってるなんて……。

ぱんなこったの記憶、部屋から外をぼんやり眺めるミスト。私の名をつぶやく姿と重なる。

目に涙が浮かぶ。私はこれほどまでに思われていた。

私は目をこすりながら、後ろ姿をじっと懐かしむように眺める。だから、残念で悲しくて。

私は一日しか“私”でられない。

私の蘇りは、失敗に終わったと言ってもよかった。一日でいったいなにができる？

ミストのことを考えれば、このまま何もしないのが良い。

でも、私は来てしまった。

「ちょっとアンタ！」

うれしくて悲しくて、怒鳴りつけるような声になってしまった。振り向くミスト。大人っぽくなってた。妙に感慨深い。

そっか、もう私より年上なんだ。

そこで気づく。呼んだのはいいけど、どうするかまったく決めてない。

頭の中は真っ白だった。

「私の奴隷になりなさい！」

わずかな時間で思いついたのは――他人になりすまして、ミストに無茶をさせることだった。

私はずうっと、ミストにからかわれてきた。今までの借りを返させてもらおう。

これならきつと、悲しくならないから。

「お断りします」

長い沈黙の後、ミストはそう言葉を紡いだ。なんか、フラれた気分。

「……なんですって？」

言うことを聞いてくれないと困る。

私はミストに詰め寄ろうとして木に引っかかってこけた。ぱんなこつたと一緒になったからか、どうも足元がおぼつかない。

「大丈夫？」

ミストが手を差し伸べる。ぱんなこつたが河原で倒れていた頃の記憶が流れた。

あの頃とまったく同じ。懐かしくて、あたたかい。抱き上げられた感触を思い出していた。

ためらいがちに手をとって立ち上がる。

抱き上げられたのは私じゃないのに恥ずかしい……。

「いつまで触ってんのよ！」

これ以上思い出しちゃいけない。悲しくなってくるから。

「ご、ごめん。じゃあ僕はこれで」

「ちよつと待ちなさい」

通り抜けようとするミストの肩を掴む。

「だーかーらー、私の奴隷になりなさいって」

お願いだから言うことを聞いてほしい。

「ごめんなさい。なに言ってるかよくわからないんですけど」

「つべこべ言わずに、首を縦に振ればいいのよ！」

ミストならこれで断れないはず。

「いや、そう言われても……」

そうだった。私はアイシヤじゃなかったんだ。

「ああもう！　じれったいわね！」

また悲しくなってきた。どうすればいい？

沈黙していたミストが口を開く。

「わ、わかりました……」

「ふん、最初からそう言いなさい」

当然のように答える。バレちゃいけない。心の中で安堵する。

「アンタ、サーカス行った事ある？」

さっそくミストに無茶を言う。サーカスには行ったことがなくて、一度連れて行ってもらいたかった。

「あ、やっぱいい」

そんな時間がないことに言ってから気がついた。

「とりあえずアンタ、町まで来なさい」

町に行けばなんでもある。色々と思ひ浮かべていたら、笑みがこぼれてきた。

「それじゃ、明日の午後一時ね。門の前にいるから」

うれしそうな表情を見せるわけにはいかない。急いできびすを返して歩き出す。

と、またさっきの木に引っかかってこけた。

明日の準備を急いだ。

私にはやり直すことがある。

町へは三十分前に着いた。

さすがに着くのが早すぎたかもしれない。

約束の一時になった。

ミストの姿を探してきよろきよする。

一時を三十分過ぎる。ミストはまだ来ない。

私は二時と言ったかもしれないと思い始めた。

二時十分になった。ミストが来ない。

ふいに、私の頭と背中がうずきだす。

ぱんなこったの耳と羽が生えていた。

少しずつ私が失われていく。

三時になった。

無理やりでも連れてくる。そう思い始めたとき、ミストが来た。

膝に腕をついて、苦しそうに肩で息をしていた。町を走り回ってみたい。

ミストが二時間も遅刻したのは、私が町としか言っていなかったせいだった。

私は自分のうかつさに齒噛みする。

「そうそう。私のことは“ご主人様”って呼ぶことね」

確か奴隷は主をそう言うはず。

「で、ではご主人様。お名前はなんとおっしゃるのでしょうか?」

「私は……そうね、うーん」

私はアイシャ。

「私の名前はカイリョーシア」

私のもうひとつの名前。生まれたときに付けられる真の名。生涯で両親とたった一人にだけ明かしても良い、大切な名前。

「アンタの名前は、どてかぼちゃね」

どてかぼちゃ。ミストが好きなもの。ぱんなこったが好きなもの。

私が好きなもの。

「な、なぜ翼が生えてるんでしょうか？」

「なんだ、そんなことなの？」

さつき突然生えてきた。なんとかごまかさないといけない。

「お気に入りのよ、これ」

「うーん。そうですか」

「なに？ 文句でもあんの？」

「い、いえ。あとはその、頭に乗ってるのは？」

「これ？ これは耳だけど？」

「そうですか。なんだかすごいですね……」

ミストは私の全身をまじまじと見回す。

私が着ているのは昔の仮装パーティの衣装。家をあさって出てきたものだった。

「なに？ どてかぼちゃは私の格好がそんつなに気に食わない？」

なぜかこれが気に入ってしまった。ぱんなこつたの趣味かもしれない。

「あ、そうだ。手を出しなさい」

ミストの手を取って握り締める。

ぱんなこつたがそうしたいと思ったんだ、と言い聞かせた。

私の手があたたくなくて、やわらかくて。

そのままぐいぐいミストを引っ張って行った。

行くアテもないまま、町の中を練り歩く。

「アンタ、どっか行きたいとこないの？」

「そう言われても、僕はほとんど町になんて来ませんから」

困ったな、と辺りを見回すミスト。

しばらく思案して市場を勧めてきた。

「いいわよ」

「わかりました。行きましょう」

「ふーん。ほんとに行くのね」

呆氣にとられた顔してる。

「えっと、やっぱり別の場所にします？」

困った表情を浮かべてる。やっぱり気分が良い。

「いいわよ、別に」

可笑しくて思わず笑みがこぼれる。ミストが私をからかうのもわかる気がした。

貴金属店で指輪を眺める。

「よし、これにする！」

きらきらと紅い輝きを放つルビーの指輪だった。

ミストには一生買えないだろうなー。

「合図、出すから」

ちよっと借りることにした。あとで必ず返すから。

私は逃げ出した。

捕まったところで、ぱんなこったの力があれば何もなかったことにできる。

ミストを困らせるのは楽しかった。

結局取り押さえられてたみたいだけど。

「こ、この……！」

拳を振り上げるミスト。

怒ってるみたいだけど、やっぱり少しも怖くない。

懐かしいな……。

盗もうとしたお詫びに、なにかひとつ商品を買わされる。

なぜか猫の目みたいに見える宝石の、安物の指輪が気に入ってしまった。きつとぱんなこっただ。

もつと高級そうなのだったら、それらしく見えるのに。

貴金属店を出て真向かいのレストランに入った。

ミストに買ってもらった指輪を眺める。

「その指輪、そんなに気に入った？」

「んー？　そうでもないわよ」

でも、実際はこれくらいのお安物なのかもしれない。ミストはお金になんて興味ないし。

そう考えると、これが一番良い指輪。

あるはずのない未来を思い浮かべてしまう。

「そう。しっぽ振るくらいうれしそうなんだけどね」

ミストの言葉に硬直しそうになる。

しっぽまで生えてきたみたい……。

動揺を隠すようにして、一気に紅茶を飲み干す。

「なによー？　気に食わないの？」

「そういうわけじゃないけど」

「ならいいじゃない」

また指輪に向き直って眺めるフリをする。

残された時間はあとどれくらいだろう。

唐突にミストが私の耳に触れる。

敬語で話さなくなってるし、何か感づいてるのかもしれない。

「次はあれ」

天空の塔を指差す。見晴らしが良くて誰にも邪魔されない場所。

「塔には入れないよ」

「そう。行くわよ」

立ち入りが禁止されてるのは知ってる。

「塔に入っただけにするつもり？」

「決めてない」

これだけは決めていた。

「塔の中は魔導兵が警備してるらしいけど」

「そう。行くわよ」

「これがきつと最後だから。」

「心配しなくても大丈夫よ。魔導兵は得意だから」

魔導兵は、ぱんなこったの遊び道具だった。

子供向けの木馬に乗ろうなんて、塔に入るのを渋るミスト。
やっぱり怪しまれてる。

足早に天空の塔へと向かう。

天空の塔最上階。長椅子にミストを座らせる。

意を決して、ミストに微笑みかけた。

「アンタ、お腹空いたでしょ？」

「ああ、そうだね」

「しょうがないわねー」

私は昨日準備してきたものを取り出す。

「もしかして、作ってきてくれたのかな？」

「何言ってるの、たまたまよ」

「そう。ありがとう、うれしい」

ミストの言葉に思わず声が漏れそうになる。

まだ泣いちゃいけない。

深呼吸して胸を落ち着かせる。

「ほら、口開けなさいよ」

私は泣きそうになりながら、ミストにどてかぼちゃのスープを食べさせた。

口を開けるミストが変な顔で、ちょっと間抜けに見えてしまった。

「どう？ おいしいでしょ？」

「おいしいよ」

こんなのがおいしいはずない。

私は料理なんて作ったこともなかった。かぼちゃを砕き、見よう見まねでそれらしい味付けをしただけ。

でも、あの日もきつとこうなつてたと思う。

『おいしいよ』……か。

私のいなくなった日。

そして今日は——ミストの誕生日。

うん。もうこれで十分。

やりたいことは全部やった。

そろそろ覚悟を決めよう。

【魔王な彼女】——いつかきつと——

——これは私の記憶

私の思い——

* * *

ミストは遠くを眺めていた。
私も同じように見てみる。
夕焼けに染まる黄色い景色はキレイだった。

「どてかぼちやのスープ、ずっと僕に食べさせたかったのか」
ミストがぼつりとつぶやく。
私には答えられない。やっぱり私の正体はバレてた。
ミストが私の髪に触れる。
こそばゆくて目を細める。

「おかえり」

私は返事をしない。

ミストの家に帰ったと錯覚する。

私の家じゃないのに、ミストは「おかえり」って。

いつも私が居座ってるからだ、と最初はジョーダンで言ってた。
懐かしい日々が思い浮かぶ。

胸が締め付けられるようで、苦しい。

「会いたかった」

言葉が出そうになるのを抑える。

こみあげるのはどうしようもない切なさ。

私は抱きしめられた。

初めて会ったときとは違う。

この手に、腕に、頬に、ぬくもりがあたたかい。

ミストの鼓動が聞こえる。

ずっと求めていたぬくもりがあたたかい。

広くなつた背中に手を回す。

『やりたいことは全部やった』——こんなウソだ。

『うん。もうこれで十分』——言い聞かせただけだった。
家に帰りたい。ずっと一緒にいたい。

「一緒に帰ろう」

ミストの声で気がつく。

もう歯止めが利かなくなる。

私、

私は……。

私は首を横に振る。

私にはまだやり残したことがあった。

ミストを押しつける。

「さよなら」

泣きついたって、私はもう少しで消える。

顔を伏せ、ミストを背に出口へ向かう。

私を追いかけようとするミストを手で制す。

そして振り返る。

私はお別れをするために蘇ったんだ。

そして――

「いつか、きっと」

——またどこかで。

私の願い。

突然、背後から仰け反るほどの衝撃。

体がしびれて地面に膝をつく。紫の電流が私の体から飛散する。

私はこの雷撃を受けたことがある。

忌まわしい記憶が脳裏に広がっていく。沸々と湧いてくる憎しみ。雷撃の発端を睨みつける。遠くには紫電が杖の先から散っている年老いた魔術師。そばに神官の少女。

そして先頭にいるのは——勇者。この国の王子。魔物を皆殺しにする者。笑いながら殺す悪魔。

町の中からずっと後をつけられていた？

かつての時と同じ、白い光が集まっていく。

立ち上がるうとしても体が震えて膝をつく。まともに後ろから受けた雷撃のせいだ。

光は瞬く間に大きくなって、勇者から放たれた。

私はこんなヤツに殺されたくない。

光が音もなく私に突き進む。

ダメだ、体が動かない。

視界いっぱい広がる白い光。

目を閉じようとして体突き飛ばされた。

ミストが光に包まれる。

光の中心から幾千の光の粒子。槍の形をして内側から飛び出していく。

ミストの形をした影。張付けられたように立っていた。影が細かく跳ねる。何度も、何度も。槍が飛び出すたび脈打つように跳ねる。

影絵にも似た光景が私の前で繰り広げられている。

「あっああ……あああああああ！」

放出を終えた光はミストの体に吸い込まれるようにして消える。

ミストの体は腰から地面に落ちた。

壊れたおもちゃみたいに空を向いて転がっている。

「ミスト！ ミストッ！」

這い寄りながらあらん限りの声を出す。

ミストは手足をだりりとして動かない。

「ねえ、返事しなさいよ……ねえってば」

ミストの上半身を抱える。

首が垂れ下がった。

「あ、あっ……なん、で」

開いたままの瞳はただ、黒く染まり始めた空を映していた。

ミストの口を手でなぞる。

もう私に笑いかけることはない。

指にかすかな風を感じた。

息、息してる。

まだ生きてる！

刹那、後ろから私の肩をかすめて高温のもの、火炎が突き抜けていった。服の焦げた臭いが鼻をつく。きっと魔術師だ。

ミストの体のどこかからか、地面に血が滴っている。わずかずつ広がっていた。

「必ず助けるから」

ミストの頭を抱え、ゆっくり地面に下ろす。

早くしないと手遅れになるかもしれない。

でも、どうすれば助けられる？

「人間には効果が薄いですねえ。村人すら倒せないなんて」

ぞっとする悪魔の声が、背後からわずかに聞こえた。

ゆったりとした足取りでこちらに向かってきている。

——コイツだ。

魔物が私を襲ったのも、コイツが森を追いたてたから。

棲み処を奪い、

同族を殺し、

私を殺そうとした。

安らぎを、

あたたかさを、

ぬくもりを、

かけがえのない大切なものを、

私からすべてを奪う者。

黒い衝動が肩を震わす。

震動が大気に伝わる。

青い瘴気が体から立ち昇っていく。

魔力が暴走する。

風が吹き荒れ、上空に流れ込んでいく。再度魔術師から放たれた

炎が、渦に飲まれて空に消える。

雲が立ちこめ、雪が舞い降りる。

教会の鐘が夜の訪れを告げる。

あたりを闇が支配していく。

見開いた瞳が紅く輝きを放った。

「凍てつけ！」

振り向きざま、勇者を鋭い眼光で射抜く。空気が氷結する。

勇者は小さく跳び退り、剣が淡い光の軌跡を描いて魔力の氷を碎く。

憤怒が雷雲を巻き起こす。右手を空に掲げる。

「くらえ！」

勇者の頭上から落雷、落雷、落雷。

雷鳴だけが轟く。勇者はうつすらと笑みを浮かべながら軽々とかわしていった。

魔術師の杖が紫を帯びる。

瞬間、かがんだ頭上を雷がかすめて虚空に消えた。

間合いを詰めていた勇者の剣が頭上から襲い来る。

横に回転してかわす。

勇者が跳んで距離を詰める。

笑いながら剣を振り下ろす。

右に転がる。

笑い声と共に剣を突き出す。

耳元に風。よじってかわしたところに剣が頬をかすめる。血がにじむ。

勇者がふいに後退る。視界に魔術師の紫光。

起き上がった直後、雷が雪を蒸発させて突き進む。

マントに魔力を込めて振り回し、目前で軌道をそらす。髪が一束焼けた。

勇者を横目に跳び退く。そして左手を魔術師へ向かって突き出す。
「雷よ！」

大気を揺るがして金の雷が降り注ぐ。

魔術師の頭上に張られた薄い膜を貫き、掲げられた杖を伝って地面を金が拡散していく。

魔術師は体を震わせながら膝について倒れこんだ。杖が二つに分かれて転がる。

勇者は剣についた血をなめていた。口の端を持ち上げて奇妙な笑いを浮かべている。

ぞくりと背筋に悪寒が伝う。

過去の惨劇が脳裏によぎる。怯みが浮かぶ。一筋の汗となって頬を伝う。

早くコイツを倒さないと、ミストは助からない。

湧き起こる焦燥を打ち消すように歯を食いしばる。

勇者が腕をだらりと下げたまま歩み寄る。

勇者を見据え、右手で中空に円を描く。

描いた先から、黒い剣が次々に現われる。

勇者は前方に手で大きく十字を切っていた。まぶしい光が浮かび上がっていく。

「ゆけっ！」

六つの剣が黒い影を伸ばすように勇者へ向かって突き進む。目を見開いて勇者を射竦める。腕を天に掲げる。

雷雲が金の光を放つ。凍結、雷鳴、剣撃。一斉にたたき込む。

直後、金の光をまとった十字の光が黒の剣を弾き飛ばして牙を剥いた。

かわせない。肩を浅く挟む。

左腕がしびれ、肩を押さえた。痛みで目を細める。思わずうめき声が漏れてしまう。

勇者は何事もなかったように突っ立っていた。ざっくりと切れた左頬から血が伝う。

勇者が頬の血をなめる。

勇者は狂喜のような笑い声を上げた。口が凶悪なまでに吊り上がっている。おもしろいおもしろいおもしろい、呪文のように繰り返す。

怖い。

私が、魔王が恐れている。

冷や汗で服が肌に張り付く。怒り、憎しみ、悲しみ、すべて気圧されようとしていた。

肩を押さえながらじりじりと後退する。

視界の端にミストの姿が映っていた。地面の血がさっきより広がっている。

どうすればいい？

どうすれば、どうすれば……。

魔術師の傍らに座る神官の少女の姿が目に入った。

傷を治しているんだろうか。

神官……傷を治す――

あの少女ならミストを助けられる？

勇者が剣を両手で握り締め、笑いを張り付けたまま突っ込んできた。た。

とつさに右手を掲げる。

雷が帯をなして集まり、剣を形どっていく。

雷光のほとばしる金の剣が手に収まった。

勇者が奇声をあげながら淡い光を放つ剣を振り下ろし、具現化し

たばかりの剣に叩きつけた。

つんざくような音を上げ、火花を散らす。

受け止められたのも一瞬、渾身の重い剣撃を右手だけでは耐えられない。

半身をひねってかわす。

続けざまに勇者の突き、突き。

初撃を紙一重でかわす、連撃がさけられない。ローブがさけ、血が伝う。

雷の剣のなぎ払い。

勇者の斬り上げが合わさった。

甲高い音を立てる。

金の剣が舞い上がり、地面に突き刺さった。

「ほら。待つててあげるから、取って来なよ。なんならもう一本使ukai?」

寒気がするほどにこやかな表情で勇者が言う。

憎いのに、くやしいのに、手も足も出ない。

数多の魔物を屠ってきた勇者にとり、私は遊び道具でしかないのか。

私はコイツには勝てない。

それならば――

「あの村人を助けてください」
ひれ伏す。

もう誇りなど要らない。

「お願いだから……」

憎しみや悲しみも晴らせなくて構わない。
ただミストを救えればそれでいい。

「ケダモノの言うことなんて聞いてられない、なっ！」

蹴り飛ばされる。

息が止まってむせる。

「村人なんてどうでもいいよ。早く剣を出すなり取ってくるなりしなよ」

腕を組み、苛立たしげに言い放つ。

ダメ……か。

私は覚悟を決めて顔を上げる。

もう私にできるのはただひとつ。

最後の賭けに出る。

勇者に背を向けて力の限り突っ切る。

目指す先は——神官。

背後から飛んできた真空波でマントが、ローブが、肌が切り裂かれる。

髪が切れて落ちる。

無数にできた切り傷から血が流れていく。

魔術師の治療をしていた神官が驚愕の表情を向けた。

眼光で靴を凍結させる。

怯える神官の顔を両手で掴む。

額をあわせ、瞳を覗きこむ。

紅い瞳が輝きを増す。神官の目に涙が浮かぶ。

背になにかが突き刺さる。

痛みがない。きつと深い傷。

意識が飛びそう。

閉じかけた目を見開く。

崩れ落ちそうになるのをこらえる。

まだあともう少し……。

肩に突き刺さる感触。

もろろとする。

ぼんやりとした視界。

紅に呼応して明滅する神官の瞳。

終わった。

神官に寄りかかって倒れる。

これでミストは助かるかもしれない。

間に合うかな……。

「つまらないよ」

背後から勇者の、死神の声が

* * *

——この指輪に宿るは魔王の魂の欠片

アイシャとぱんなこったの最後の思い出——

【魔王な彼女、村人の僕】

天空の塔に凍える風が吹き荒ぶ。

「いつかきつと、取り戻すから」

止まない雪が降り積もる。

「僕は魔王になろう」

闇夜に教会の鐘の音が鳴り響く。

* 旅立ちの物語 *

【麻緒】—魔王—

わたしは観覧車から外の景色を眺めていました。夕焼けに染まる街並みが、これまでのことを思い起こさせます。

* * *

わたしは“魔王” そう呼ばれていました。
名前が麻緒だから。
そして――

「ねーねー、魔王ちゃん。ちょっと笑ってくんない？ こっ、が
ははは！ みたいな」

「え？ あの……」

「ほら、早くしなよ。もう写メの準備できてっからさー」

ファンタジーの太った魔物みたいだから。

わたしは一人でした。
いつも一人でした。
一人になりたかった。

全学年参加のマラソン大会。
息も切れ切れに、わたしは何周も遅れて最後尾を歩いていました。
二月の風が頬へ突き刺さるようにして吹き抜けていきます。
「あぐ」

わたしは、つまづいて倒れました。

もう立つ気力はありません。

なんでマラソン大会なんてあるんだろう。どうして、こんな苦しい思いしなきゃいけない？

道端に突っ伏したまま、顔をくしゃくしゃにして真っ赤に腫らせていました。

次々に、わたしを追い抜いていく足音。ケータイのカメラを取る音。げらげら笑う声が、遠ざかっていきます。

惨めで、辛くて、悲しくて。

涙が出てきました。

早く帰りたい。

「大丈夫？」

上から声が聞こえました。

顔を上げると、男の人が前屈みになってわたしに手を差し出していました。

わたしは信じませんでした。

くしゃくしゃになった顔のまま、彼をキッと睨みつけます。

わたしの手を掴んで仰向けにひっくり返すつもりなんだと、そう思っていました。

でも、

「なんで睨んでるか知らないけど」

彼は手を差し出したまま、わたしを真っ直ぐに見据えていました。「僕は手をどけるつもりはないよ」

黒く澄んだ瞳で。

わたしは信じられませんでした。

こんな人がいるなんて、わたしに手を差し伸ばすなんて、睨んで

るのに手をどけないなんて。わたしは、わたしは――
また涙が出てきました。

手を震わせながら伸ばすと、わたしの体が軽々と引っ張られて持ち上がりました。

「歩ける？」

彼の言葉に、こくんと頷くわたし。

彼はそのまま、わたしの手を引いて歩き始めました。
男の人と初めて手をつないだわたしは、顔から火が出そうでした。
追い抜いていく人が物珍しそうな視線を向け、にやけながら去っていきます。

わたしは、今度は恥ずかしくて泣きそうになりました。

「僕はちよつと疲れて歩いてるだけだから」

彼は気を使ってくれたのか、つないでいた手を離しました。

わたしの隣で、歩調を合わせて歩きます。

結局、彼は最後までわたしについてゆつくり歩いていました。
ゴールすると、彼は何事もなかったように去っていきます。
わたしはただ後ろ姿を見つめていました。

わたしはその夜、ほとんど眠れませんでした。

一ヶ月が経ちました。

わたしはいつの間にか、彼の隣を歩く夢を見るようになりました。
食事もあり喉を通りません。

もう一度会ってみたい。もう一度あの瞳を見たい。

あの日つないだ手を見つめます。

彼を手当たり次第に探したい。

でも“魔王”のわたしは、きっと彼に迷惑をかけてしまう。
だから、今日も下校途中にあのときの後ろ姿を探しています。
彼を見つけたところで何かあるわけもないのに。

二ヶ月が経ちました。

彼の姿は見つかりません。

わたしよりひとつ年上だったんだと思います。

わたしは三年生になりました。

半年が経ちました。

もう彼の姿を探すことはありません。

手のひらを眺めてみる。

時々まだ、彼の大きな手の温もりを思い出します。

わたしは中学校を卒業しました。

今でも彼の姿を思い出します。

あの凍えるような寒い日、“魔王”だったわたしに差し出された
大きな手を。

睨んでいたわたしを射抜くように見据えていた黒く澄んだ瞳を。

凜とした声。初めてかけられたやさしい言葉を。

この手に残る温もりを。

わたしはきっと、忘れることはないでしょう。

【麻緒】——かなたより——

高校に入学したわたしは、友達がたくさんできました。

わたしはもう“魔王”ではありません。

むしろ、少し華奢になつていたほどでした。うつそうとしていた長い髪は短く切り揃え、薄っすらと化粧をしています。

初めてできた友達と、剣道部の見学に行くことになりました。わたしは運動オンチなので付き添いです。

友達が「あの人カツコよくない？」と耳元でささやきました。

友達の見ている方を振り返ります。

彼がいました。

わたしは目を疑いました。眩暈がしそうです。心臓が止まりそうでした。なにか言っている友達の言葉も耳に入りません。目に涙が浮かんできました。体の震えが止まりません。

やっと、やっと見つけました。もうあきらめていた彼です。黒く澄んだ瞳をした彼です。胴着を着て真っ直ぐ前を見据えています。あの頃とまったく変わりません。

わたしは目をこすりながら、彼の姿をじっと懐かしむように眺めていました。

わたしは今日も放課後の教室から外を見ていました。

部活に向かう彼の後ろ姿を見て家に帰ります。

わたしは彼を見つけることができました。でも、どうしていいかわかりません。

タイミングを見計らって、廊下ですれ違う彼に何度か声をかけようと思いました。でも、何を話せばいいかわかりません。

ただただ、彼に対する想いだけが募っていきました。

そして、昨日の夜。

わたしは部活が終わるのを待つて、一人でいた彼にやっとの思いで声をかけることができました。

「ああああの……ゆ、ゆうしゃさまに、なってくれませんか！」

わたしが魔王だったなら、彼は勇者。過去のわたしという魔王は、彼のおかげでいなくなりました。

でも、これではワケがわかりません。わたしは声をかけるのに精一杯で、頭が真っ白になっていました。なぜこんなことを言ったのかわかりません。

「ごめん」

彼はそう言葉を紡ぎました。

わたしはワケのわからない告白で、これまでの思いをみんな台無しにしてしまいました。目の前は真っ暗で、何も聞こえません。彼になにかを言っていました。

わたしは彼から逃げました。

でも、おぼつかない足同士が引っかかり、倒れてしまいます。

「大丈夫？」

彼が手を差し出していました。

あの頃とまったく同じ優しい声。懐かしくて、うれしくて、けれども戸惑いがちに手を伸ばします。

立ち上がって逃げようとするわたしを、彼が呼び止めました。わたしの言葉の意味がわからなかった、と。

でも、わたしは何を言えいいかわかりませんでした。言葉になりません。わたしの思いはどうすれば伝わるのか。

考えがまとまらなかったわたしは、頭の中に浮かんだことを話し始めます。

思いつくままに、彼をデートに誘いました。

そして彼の返事を聞いて、わたしは跳び上がりそうなくらい喜びました。感極まって一方的に予定を決めてしまえます。浮かれてしまつて、またつまづいて転びました。

遊園地へは三十分前に着きました。

さすがに着くのが早すぎたみたいです。

約束の一時になりました。

彼の姿を探してきよろします。

一時を三十分過ぎました。彼はまだ来ません。

わたしは二時と言ったかもしれないと思い始めました。

二時十分になりました。彼は来ません。

もしかして、今日は何か予定があつたかもしれません。わたしは彼の予定をまったく聞かずに約束をしていたことを思い出しました。

三時になりました。

やつぱりわたし、ダメだったのかな……そう悲観していると、彼が来ました。

膝に腕について、苦しうに肩で息をしていました。遊園地まで全力で走って来たみたいです。

彼が二時間も遅刻したのは、わたしが遊園地としか言っていないかつたせいでした。他の遊園地を探してまで、わたしの一方的な約束を守ってくれました。

「僕は今野勇児。名字一緒だね、麻緒ちゃん」

彼に初めて名前で呼ばれました。

なんだかこそばゆくて、チケットを買いに行つたわたしはまた転んでしまいました。

「麻緒ちゃん、なんで羽生えてんのかな？」

「えとー、かわいくないですか？」

こういう服装が男の人は好きだと聞いていました。

友達の情報、間違つてたみたいです。反応はイマイチでした。

でも、わたしはかわいくないですか？

遊園地へ入ろうとする彼に、わたしは大胆にも手をつないで欲しいとお願いしました。

わたしはまだ彼の手の温もりを覚えています。

彼と手はあの寒い日と変わらない、あつたかくて大きな手でした。

遊園地に入つたわたしは、手の感触にぼーとしたまま、なぜかジェットコースターに乗りたいたいと言っていたみたいです。

わたしは絶叫マシンがまったくダメです。

「あれ？ 乗りたくないの？」

「いえ、あの、わたしは……なんでもいいです」

でも、彼と一緒になんでも構いませんでした。彼も絶叫マシンは苦手だったみたいですけど。

コーヒーカップから降りた後、気持ち悪くてベンチに座っていました。

彼が背中をさすってくれます。

わたしはまた、うれしくなって震えてしまいました。

彼はやっぱりやさしい人です。

わたしの得意なおばけ屋敷。彼は絶叫マシンよりもつと苦手だつたみたいです。

錯乱した彼は、わたしを抱きかかえて走りまわっていました。わたしは夢を見ているようでした。いつか見たことのある夢。思いも寄らないところで夢が叶ってしまいました。

わたしはもう一つ夢を叶えました。

わたしが作った料理を、彼に食べさせることです。

一度だけ作ったことがある料理は、カレーでした。

お弁当にカレーなんておかしいけど、これしか自信がなくて。きつと、冷めてておいしくなかったと思います。

でも、彼は文句も言わずに食べてくれました。家庭的な味だと言ってくれました。

もう、胸がいっぱいです。

わたしは覚悟を決め、観覧車に乗りました。

* * *

外の景色から、窓に映る彼に目を移しました。

黒く澄んだ瞳と目が合います。彼も窓越しにわたしを見ていました。

窓から目を離し、彼の方に向き直りました。

彼もわたしを見えています。

目を閉じて息を深く吸い込み、緩やかに吐き出す。

そして、わたしは――

『かなたより』

「わたし、あなたのことが好きです」

なんの飾り気もなく、わたしの思いを。

『私の思いを』

「わたしと一緒にいてください」

ただ真っ直ぐに。

『あいをこめて』

彼は無言のまま、わたしをじっと見つめていました。

「ゆうしゃになるには、どうしたらいい？」

一瞬、わたしは彼が何を言っているのかわかりませんでした。
でもこれは――

きっと、最初の告白の返事。

「わたしのそばにいてください」

わたしが彼に望むこと。

『私の願い』

「そっか」

彼は下を向いて、しばらく考えているようでした。

【魔王と呼ばれた彼女、時代錯誤の僕】

彼が顔を上げ、黒い瞳でわたしの目を見据えます。

「なら、僕はゆうしゃになるっ」

* 始まりの物語 *

「もう暗くなってきたんだけど。観覧車、何周するつもり？」
「す、すいません！ 次は降りれますように……」

終

あとがき

まずは、最後までお読みいただき、ありがとうございます。
エンディングの後にゆるーい感じの文章がくるのを避けたかったため、一話分の扱いをしています。
ということ、あとがきです。

* この作品のテーマ

この作品のテーマは『対比』です。これは当初からまったく変わ
りません。
麻緒の独白で勇児編を最初から見直した方、ありがとうございます。
す。

アイシャの独白でミスト編を最初から見直した方も、ありがとうございます。
ございます。

勇児編とミスト編の文章を「ここはこうしたのか」や「あ、ここ
の部分こう換えてある」などと一行ずつ見比べていただけたなら、
それはもう万々歳です。

今後、推敲を繰り返して加筆修正を何度か行うと思いますので、
その際はまた見比べてもらえると幸いです。

なお、加筆修正時にエピソードとして『勇児と麻緒のその後』を
追加するかもしれませんが。勇児編に比べると、ミスト編は二倍ほど
の文量がありますし。

そのためにも、あとがきを一話分として扱ってたりします。

* こんな話じゃなかった

この作品はこんな話ではまったくありませんでした。
というのも、当初の予定では——四千字程度のマジメな現代もの

を書いて、その後に六千字程度の魔王の彼女と村人の彼で、はっちやけた話を書く——でした。

なので、これでも勇児編の話はコメディ要素を少なめに書き進めていました。ネタフリでボケとおせば、オチが引き立たないので。

書けば書くほど増える字数。勇児編の最終話を書き終えた頃には一万字を越えてしまいました。

と、勇児編の終盤を書き終わった後、迷いが生じてしまいました。「果たして、このマジメな話でボケ倒していいんだろうか……」

と。ミスト編の一話目を書き終えたあたりで、やっぱダメだあと断念。いちからストーリーを組み直すことにしました。

次に、勇児編とミスト編に何か関連が欲しい、と。そんなことを考えて、ミスト編はこんな話になってしまいました。

最終的にミスト編はシリアスになってしまったため、意図してコメディ要素をもっと抑えることになりました。

さて、そんなわけで。

連載序盤からの読者の皆様、中盤あたりからまったくコメディな話じゃなくて申し訳ない。

そして最終話投稿時、全話の話数を入れ替えてしまって申し訳ない。

お詫び申し上げます。

* 遊園地に行ったことがない。さあどうしよう？

行った事ありません、遊園地。

正確には物心つくかつかないかの時分に行ったんですが——
「つまんなあい、早く帰って笑点みようよお」

そんなやつでした。

「ジェットコースターってこんな感じかな？」

「おばけ屋敷？ なにそれ？」

いや、ほんと困りました。

「こんなんないだろ、遊園地」なんて言われるとぐうの音も出ない次第です。

* 思わぬところでシリアスがひょっこり
勇児編で初々しい場面を書くときに、それはもう悶えながら書いてたわけです。

しかしですね、それ以上に書き直したミスト編のストーリーがシリアスすぎました。

「ミスト編の最後まで読んで序盤を読み返した時、果たして笑えるだろうか……」

と、とりあえず笑ってやってください。

* 思わぬところで戦闘シーンがひょっこり
困りました。

まあ困ってばかりです。

ミスト編最後の戦闘シーンのことです。

「たった一場面で、残酷描写指定をしないといけないのもなんかなあ」

ということで、極力残酷にならないような描写に押さえる必要があつて。

「あ、残酷だ。危ない」と、描写を削り削り。
最後の戦闘は色々と不自然なところがあります。

* 思わぬところで死亡シーンがひょっこり
これが一番困りました。

極力、人を殺さないように心がけてるんですが、ミスト編は人がばたばたお亡くなりになってしまってます。

死亡シーンの心情描写は、書くのにかなりの負担を強います。鼻歌まじりに死亡シーンを書くなんて、やりたくないですし。

* 謎

未消化の謎が多くありますね。

勇児編とミスト編の関係

麻緒とアイシャの性格が全然違う

ぱんなこったの旅

神官のラストシーン

などなど。

『村人が魔王になるファンタジーの物語』

ただの村人であるミストは、指輪を携えて旅に出る。

ミストの前に現われる神官の少女。

かつて、ぱんなこったが集めた魔物たちとの出会い。

アイシャを襲った巨大な魔物。

立ち塞がる魔術師。

そして、忘れもしない勇者。

多くの出会いと別れ、困難を乗り越えて成長していくミスト。

最果ての地で迎える結末とは――

なんて。

* お気に入りシーン

では最後に、お気に入りのシーンをいくつかあげてみます。

勇児編・麻緒が“遊園地”としか言っていないことがわかった
「すいません！ ごめんなさい！ いつか死にそうになったら切腹

してお詫びします！」

勇児君はボケ殺しのキャラで、突っ込んでくれません。

#勇児編・コーヒークップで回る

「こ、このままじゃ……バターになっちゃう」

こういうツツコミの難しいボケをされると困りますね。

#勇児編・弁当の感想

そ、そうですかと彼女が恥ずかしそうに下を向く。おっちゃん
頬を赤らめる。

な、なぜおっちゃんが……。やはりおっさんキャラが好きなの
かもしれません。

#勇児編・夕焼けに染まる麻緒を眺める

僕は彼女をどう思っている？

この勇児の心情描写が苦労した、というだけかもしれません。
ミスト

#勇児編・マラソン大会でこける麻緒に手を差し伸べる

わたしは信じられませんでした。

『信じませんでした』の後の対比が良いなど。

#勇児編・ラスト

「もう暗くなってきたんだけど。観覧車、何周するつもり？」
最後のコメディなオチはやっぱりいいですね。

#ミスト編・町の前で彼女に質問する

「そ、それじゃ……僕はいつ解放されますか？」

「つまんない」

おおい、と言いたくなるほどですね。

#ミスト編・聞きたいことを聞く

「じゃあ本題に入りましょう」

「却下！」

「で、できれば本題に入らせてください！」

「いいわよ、どてかぼちゃ。二十字以内ね」

「あ、ありがとうございます」

「あと七字」

そんなバカな……しかも読点まで入ってるなんて……。

このあたりは特に、勇児編との違いが楽しめます。

#ミスト編・魔導兵をぶっ壊す

もしかして、壊した鎧は僕が弁償するのか？

ガシャンガシャンガシャン！

ガッシャッガッシャ！

下の階から鎧の迫ってくる音が続々と聞こえ出した。

彼女に目をやると、にこやかに手もみしている。

全部ぶっ壊す気だ……。

勇児編にはない追加文章でのオチの例。

#ミスト編・どてかぼちゃのスープの感想

「そう。ありがとう、うれしい」

微笑むと、彼女は「うつ」と呻いたまま固まっていた。

勇児編の『ありがとう、うれしい』なんて言えないというフリを、ミスト編で消化。

#ミスト編・彼女の回想

私が“私”になった日の思い出――

序盤からの仕掛けを全部消化していくシーンです。彼女の心情のふしぶしにせつないものがありました。

#ミスト編・魔王モード

黒い衝動が肩を震わす。震動が大気に伝わる。青い瘴気が体から立ち昇っていく。

魔力が暴走する。

風が吹き荒れ、上空に流れ込んでいく。再度魔術師から放たれた炎が、渦に飲まれて空に消える。

雲が立ちこめ、雪が舞い降りる。

教会の鐘が夜の訪れを告げる。

あたりを闇が支配していく。

見開いた瞳が紅く輝きを放った。

たぶん修正が後ほど入ると思いますが、いよいよ戦闘が始まるという感じです。

#ミスト編・魔術師に落雷

「雷よ！」

魔術師に大気を揺るがして金の雷が降り注ぐ。頭上に張られた薄い膜を貫き、掲げられた杖を伝って地面を金が拡散していく。魔術師は体を震わせながら膝について倒れこんだ。杖が二つに分かれて

転がる。

大丈夫ですか、おじいちゃん。

#ミスト編・悪魔のような勇者

勇者が狂喜のような笑い声を上げる。口が凶悪なまでに吊り上っていた。おもしろいおもしろいおもしろい、呪文のように繰り返す。

怖い。

私が、魔王が恐れている。冷や汗で服が肌に張り付く。怒り、憎しみ、悲しみ、すべて気圧されようとしていた。
なんか、危ない人がいます。

#ミスト編・続外道勇者

それならば――

「あの村人を助けてください」
ひれ伏す。

もう誇りなど要らない。

「お願いだから……」

憎しみや悲しみも晴らせなくて構わない。

ただミストを救えればそれでいい。

「ケダモノの言うことなんて聞いてられない、なっ！」
蹴り飛ばされる。息が止まってむせる。

おまわりさん。

#ミスト編・ラスト

「魔王になろう」と言ったミストの心情と風、雪、教会の鐘の音。察するにあまりあります。

以上、あとがきでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5256i/>

魔王な彼女、××の僕

2010年10月10日20時32分発行